識する心識の妙用にして、一切の心的現象の舞臺なり。自我直覺の體は無意識にして、其用は意識なり。自我直覺を用より觀すれば、一切の自覺の根基に據りて自覺作用を更に自覺する作用と謂ふ可き者なり。[四九]是れ演繹法の究竟的起點となるべき原理を與ふる者、而も猶未だ分別計度の域に至らざるが故に、這般の原理は含みて未だ發せざる者たり。

第二、自覺。自覺は自我直覺よりは一歩を進めて、既に主觀客觀の對境の分別を生じ、其體用共に意識なる者、知識と稱すべく、觀念として擧ぐべき者の始なり。自覺は自我の全般觀念にして、自我を以て自我を觀するによりて了知せらるゝ知識なり。既に知識の始なれば、蒐集を要す。

四九　カントの所謂 Die transcendentale Einheit des Selbstbewusstseins, Anschauung. 唯識論等佛教の賴耶緣起論が阿賴耶識と萬法との關係を論ずるに於ける四分に於いて、證自證分と謂ふ者、これなり。カントはこれを目して Actus der Spontaneität といへり。(Benno Erdmann Kritik der reinen Vernunft. p.115.)

五〇　賴耶緣起の所謂自證分、カントの所謂 Selbstbewusstsein これなり。

五一　賴耶緣起論の所謂見分の意義に近く、カントの所謂 Kriterien (p. 98—99) これなり。

る事實と稱すべく、彼の究竟的起點及歸點たる原理は、乃ち玆に寓す。[五〇]自我を觀することによりて、一切の實在の了知は始まる、合理的事實蒐集の發端は玆に存す。

第三、範疇。自覺の次に範疇來る。範疇は自我に隨ひ自覺に附して存し、客觀に於ける關係の知識をして可能ならしむる所以の原理にして、正に自覺と知覺との中間に位する主觀的事實なり。[五一]自覺より範疇に進むや、漸く內より外に向ふ。

第四、知覺。知覺は外界個物の知識なり。個物は衆多の屬性を有す、屬性の類別は正に主觀自我の感性卽ち根識に相應す。根識は亦一類の範疇にして、若し現今人類の根識にして增減あらば、知覺によれる外界個物の知識は、今

日とは異樣なるべし。[五二]知覺は範疇よりは更に外に向うて進める者にして、必ず對象の客觀的存在ありて以て生ずる者なり。各根各識卽ち感性の各種に應して、知覺心像構成の成分となる者は、卽ち感覺是なり。

上述の四項は次第に客觀に近づき來るも、其方法上の過程は全く主觀の裏に存して、客觀卽ち外界の事象は唯其所緣たるに過ぎず、能觀の過程は全く心識內に存する者、之を合理的事實の蒐集と爲す。次に來る者は、經驗的事實の蒐集にして、純ら外界の事象の上に方法上の工夫を施し、以て蒐集の功を成す者、所謂事實は必ずしも主觀に於ける觀念としての事實に非ずして、乃ち客觀に於ける事實其者として蒐集を成す者なり。這般經驗的事實の蒐集に、單純と複雜との二大別あり、其各部更に別れて二となり、都合四樣の方法は生す、卽ち左の如し。

第五、觀察。　直に外界事象の上に就きて資料の蒐集を成すの第一着は、觀察なり。觀察は唯外界の事物を有りの儘に認識し了知するの過程にして、合理的蒐集事實の最終たる知覺を紹ぎて、直に經驗的蒐集を試むる所の者なり。知覺は內に於ける心像の生成について考へ、觀察は外に於ける事實の把持について考ふ。觀察は經驗的方法の起點なり、論理書に於いて每に歸納法の起點として擧ぐる所、卽ち是なり。

第六、實驗。　實驗は觀察に加ふるに一段の過程を以てしたる者、觀察が唯外界事象を自然が與ふるまゝに觀察

五二　カントの所謂Wahrnehmung. 賴耶緣起の所謂相分なり。但し佛教の講說に於いては、這般四分の順序をば本文とは反對に列叙す、其說明にいふ。
(一)相分は色聲等の本質(心の疎所緣)が心內に現れたる影像(心の親所緣)のことなり。
(二)見分は心が相分を照見知覺する作用なり。
(三)自證分は見分卽ち知覺作用を自覺する作用なり。
(四)證自證分は自證分の自覺作用を更に自覺する作用なり。

し、把持せむとするに異なりて、幾分か要求する所の問題解釋の目的に副はむが爲に、多少の工夫裝置を施して、之により て生起する現象事實を把持せむと期する者なり。

而も普通の論理學者[五三]も亦言ふ如く、觀察と實驗とは、實は質の差に非すして量の差のみ、程度を異にするのみ、自然が與ふる事象を有りのまゝに觀察すといふも、實は較〻僅少單純なる工夫裝置を以てする實驗といふに外ならず。實驗は自動的觀察にして、觀察は他動的實驗と稱するも、亦不可ならず。唯兩者の主要なる差違は其效果に倚繫す。觀察は既に必すしも工夫裝置を用ゐざるを旨とするが故に、其外界事象に於ける繼起及共在の關係を吟味するに於いて、伴差法若くは差違法を應用して、前件若くは左

[五三] Jevons: Elementary Lessons in Logic. p. 233—4.

件を增減變更して、以て後件若くは右件に於ける增減變更を觀察すること能はざるも、實驗に於いては、這般は全く自由自在なること、是なり。是故に實驗は、要するに觀察の一步を進めたる者にして、觀察其事を爲す前に、多少の意匠を用ひ、工夫裝置を加へて、其效果をして一層要求する所の知識其者に近よらしむるの進步ある者なり。卽ち實驗は觀察に比して、較〻外より內に向うて進める者とす。

觀察及實驗の方法を以て斯學の研究に必須なりと唱道せるはコムトに在りしも、更に觀察法を極端に勵行し、殆と之を以て斯學研究法の髓腦なりとせるはルプレイなり。近者スペンサル、殊にルトゥルノオ、ラボック、タイロルの徒、記述的社會學を主として、大に觀察を奬めしも、多くは旅行家の報告等を憑據とするに止まりしが、ルプレイの方法は、其規模甚だ宏大にして、又著明なる特色を有す。謂へらく、[五四]尤も

[五四] Le Play: La réforme sociale en France. 1864. 4 Tomes. Tome I. (1878, VI. éd.) p. 63—72.

確實に社會改革を成す方法は、社會事實の觀察に憑るの外なし、其目を分ちて三とす、一に各國學者の團體に囑託して、特種奇妙なる社會體制の報告を聚むる事、二に各國の政治團體及傳道會社より確實なる報告に接する事、三に歐洲各國各地各階級の家庭に親しく就き、其數三百以上を取り、其物質的精神的、及道德的形相を研究す、各個の家族の研究には一週日若くは一月を費す事、是なり。就中此第三項の方法は、尤もルプレイの方法に特有なる者にして、一般にルプレイ方法と稱する、少くも此方法を勵行するを期せざるはなし。氏の斯かる方法を用ゐしは、主としてサンシモンが思索的方法を以て社會改革を企圖せしに反對するより起れる者、其一偏に趁れるは論なきなり。

第七、比較。 觀察及實驗は、單純なる外界事象の蒐集なり、是等の方法によれる效果は單に外界個個の事象に關して知識の資料を得る者に過ぎざるのみ、個個の事象は、

經驗的方法の分野に於いて、決して未だ理法を與ふるに至るを得ず、唯理法に到達する所以の資料を與へ、成分を與ふるに過ぎざるのみ。更に進みて、複雜なる外界事實蒐集の方法に至るや、直に複雜なる事象より、理法其者を効果として得るあらむと期する者なり。觀察及實驗、卽ち單純方法の效果は、合理的蒐集に於ける知覺に對向すべく、複雜方法の效果は、其範疇に對向すべし、而して這般が資料と爲し成分と爲す所の個個の事象は、亦皆必ず觀察及實驗によりて得來る者なり。事實蒐集の複雜方法に二種あり、甲は空間的に二個以上の事象について比較的吟味を施す者にして、名づけて比較といひ、乙は時間的に二個以上の事象について比較的吟味を施す者にして、名づけ

て歷史的觀察といふ。比較を更に細別すれば三樣となる。同一時に存在する同一類の現象について比較を施し、以て其偶然的事項を省去する事、其一なり、是れ比較の尤も單純なる者にして、同一類數多の現象につき、小異を棄て、大同を取り、以て一類の事象を概括せむと擬する者なり。其二は同一時に存在する二類以上の現象について比較を施し、以て其同性異性を大小本末仔細に點檢することと、是れ比較の普通なる者にして、複雜なる者なり、而もその一定の準繩なきが爲に、複雜と困難とに比しては較〻効果を減ずるの虞なきに非ず。其三は第一第二兩種の折衷とも稱すべき者にして、異類事象に於ける類同的[五五]事項につきて比較を施し、以て這般事象の本質を吟味せむと擬

[五五] Similar を意味す。

する事、これには同一時の存在といふことは必ずしも拘らず、是れ學問上なる比較の本部とも稱すべき者にして、例へば比較解剖學に於いて、動物の一部、機關、假令へば循環系を比較解剖して、其發生進化の眞事實に達するが如き、比較言語學に於いて、各種の言語の發達の次第を比較研究して、言語發達の理法に到るが如きは、其適例なり。心理學に於いて、固有なる內省法の傍、或は兒童心理を研究し、或は下等動物の心理を研究して、一は以て人の心理の比較研究に資するが如き、亦其一例なるも、未だ充分の成果を見るに至らず。抑〻比較に於いて誤謬の生じ易きに注意すべきは、分析歸納綜合の際に在り、こは次節に於いて辨ずべし。

第八、歷史的觀察。　歷史的觀察は、比較に加ふるに更に一項の特質を以てしたる者なり。比較は空間的に二個以上の現象の比較なりと雖も、其現象や、主として類別の異同に着目するを以て、共在の吟味となること能はず。歷史的觀察に在りては、時間を經として二個以上の現象に着目し、比較の意味を有するは勿論、更に前件後件の關係より繼起の吟味となり、乃ち比較よりも一層理法の研究に近つける者なり。時間を經とする二個以上の現象の、單に比較的吟味に止まる者は、寧ろ比較の第三法に屬する者なり。歷史的觀察は、實地に於いては甚だ複雜なる者にして、單に前件後件となる一類の觀察事象のみならず、かゝる事象の數對が相互に複因となり複果となる現象の複雜なる形次[五六]をも觀察吟味する者、遂には這般の形次の二個以上の相互比較研究をも含むに至る者なり。世界の歷史的觀察より精確なる學問上の效果を收めむと欲せば、事實の蒐集の以上、更に觀念の運用の各項に渡りて、細心なる注意を拂はざる可からず。[五七]

經驗的方法の因子を尤も詳に與へたるはコムトなり。氏の社會學研究の方法は二部に分る。第一は體統に於ける他の諸學科と共通なる方法にして、之を直接方法と目す。直接方法に三種あり、第一は觀察なり、第二は實驗なり、第三は比較なり。比較を更に三項に分つ、劣等動物と人間社會との比較、其一なり、社會狀態をば同時に存在する他の社會狀態と比較すること其二なり、次第に現れ來る社會狀態を前後相比

五六　Configuration を意味す。

五七　世俗の所謂科學的研究の多義なるが如く、世俗の所謂歷史的研究、亦太た曖昧なる名稱なり。觀念の模稜を免れず、誤用は殆ど常なりと思ふ。歷史的研究に近き者、所謂歷史的觀察なる者は、約四樣の意義を綜合せしめむとする者、特立の者を個々に迂なりとするの論者なり。

(一)事實に基つく論議。此意義にて歷史的研究を唱ふる者は、人事の實驗の報告書と見做し、實驗の實證を歷史の事實に取らざる論を斥けて空論と呼ばむとする者なり。

(二)歷史哲學的假想の論議。此意義の論者は、局論、結論、歷史的秩序的進步論等、所謂歷史的反復論等、所謂歷史哲學的假想を眞理と信じて、必ず之に適合せしめむとする者、特立の者を迂なりとするの論者なり。

(三)考證的論議。此意義の論者は、過去事物の研究をば、考證的に非されば以て確實と爲し難しとし、眞正に復し強ひて其考證を求むる所の論斷と、その內包的關係あり、やの問はざる者と爲す。

(四)國粹的論議。此意義の論者は、歷史を以て國民統一的信仰の經典と看做し、神聖なる敎育上の一義として歷史を以て國粹等の崇念を以て社會事物に對するの要求なりとし、歷史的研究及歷史的觀察をば、一種の社會學的研究の如く、一般の進步的潮流の御目的なりとし、全然の遵般の尤も複雜なる者なり。歷史的觀察より精確なる學問上の效果を收めむと欲せば、事實の蒐集の以上、更に觀念の運用の各項に渡りて、細心なる注意を拂はざる可からず。[五七]

經驗的方法の因子を尤も詳に與へたるはコムトなり。氏の社會學研究の方法は二部に分る。第一は體統に於ける他の諸學科と共通なる方法にして、之を直接方法と目す。直接方法に三種あり、第一は觀察なり、第二は實驗なり、第三は比較なり。比較を更に三項に分つ、劣等動物と人間社會との比較、其一なり、社會狀態をば同時に存在する他の社會狀態と比較すること其二なり、次第に現れ來る社會狀態を前後相比

較すること其三なり。而して最後にコムトは附記して謂ふ、比較の次に更に直接方法の第四種なくばあらじ、是れ卽ち歷史的方法にして、研究のやさろ。今一言を添へて其吟味を要する所以を擧ぐ。尙ほ此方法は、論理的整備よりも寧ろ大體を具備すること其一種としても方法中の尤も複雜なる者、而して尤も複雜なる社會現象を取扱ふ者なりと。コムトの經驗的方法は、論理的整備よりも寧ろ大體を具備すること其一種としても歷史的方法は、論理的整備よりも寧ろ大體を具備すること其一種としても

研究法の代表として、フイエエはヲルムス[五八]、近者種種の著述出づ。[五八]

歷史的方法の重要の認めらるゝや、近者種種の著述出づ。[五八]

近時佛國に於ける社會學研究の代表として、フイエエはヲルムス[五八]、其語にいふ、第一には一切の社會現象は、相互に密に相關せる者なるを認め、探究の際一の漏洩なきを期すべき事、第二には其各個の研究は、主觀的方法よりも寧ろ客觀的方法を取り、觀察し、分類し、歸納し、而して發明及構成を避くべき事、故に第三はそがある如く社會を知ることを力むるに於いて、始めて其あらざる可からざる事共を知るを得べし、改革を企つる前に學を講せよ、實用の爲に學べ、而も實用の前に學べ。

乃至第三の意義なるに於いては、科學的研究の一種としてもやさろ。今一言を添へて其吟味を要する所以を擧ぐ。尙ほ此方法は、論理的整備よりも寧ろ大體を具備すること其一種としても歷史的研究法は、全く別事なり。[五八]

[五八] 其生なる擧くれば Karl Lamprecht: Alte und neue Richtungen in der Geschichtswissenschaft. Ch. Rappoport: Zur Characteristik der Methode und Hauptrichtungen der Philosophie der Geschichte. 1898. Langlois et Seignobos: Introduction aux études historiques.

[五九] Fouillée: Etudes récents de Sociologie. p. 5.

第七節　觀念の運用

觀念の運用は事實の蒐集の後に來る、何となれば、吾が所謂事實は、經驗的事實及合理的事實の兩般を含みて、知識の資料其者の稱呼に外ならざればなり。知識の資料は既に必ず觀念たり、故に事實蒐集の後を承くる者は、卽ち觀念の運用なり。

觀念の運用は全く思想界の事たり、これが正確眞實なる運用を期する者は、卽ち思想の理法を研究する論理學の事たり、故に本節は唯其梗概を擧ぐれば足る。

合理的事實は合理的方法の與件なり、論理上には演繹法の豫定なり。經驗的事實は經驗的方法の與件なり、論理

上には歸納法の豫定なり。是故に兩般に於ける觀念の運用は、唯其順序を反對にするのみ。

觀念の運用は二類に大別す、內的運用及外的運用なり。其各類亦二種ありて、觀念運用の因子は都合四個を算ふ。

觀念の內的運用の第一は分析なり。分析とは、一個の觀念について、其屬性をば、數を悉して分解し、複雜なる觀念をば、單純なる衆觀念の集成なりと明瞭にする事なり。這般單純なる觀念の方式は、卽ち內界實在、所謂範疇、是なり。

觀念の內的運用の第二は綜合なり。綜合は正に分析の反對にして、單純なる衆觀念を、複雜なる一觀念の屬性として、洩脫なく合成し、以て單純なる衆觀念は複雜なる一觀念の屬性なりと明了にする事なり。這般複雜なる觀念は、卽ち外界實在の種類に應ずる者なり。

觀念の內的運用は分析及綜合の二種ありて、此二種、實は亦各二樣の別を存す、內包的及外延的是なり、這般の分別を爲すときは、分析及綜合の稱呼は、常に其內包的なる者に專用して、其外延的なる者には、個別及概括の稱呼を用ゐるを常とす。

觀念の外的運用の第一は演繹なり。演繹は普遍より特殊に推度する間の思想運用の總目にして、直接推度及間接推度の二樣あり。

觀念の外的運用の第二は歸納なり。歸納は特殊より普遍に推度する間の思想運用の總目にして、完全歸納及不完全歸納の二別をなすことあり。

演繹及歸納の二種、亦其起點に於ける觀念の對內的運用の性質によりて、內包的及外延的の二樣あるは、論を竢たず。但し此際特に名稱の區別を爲すことなし。

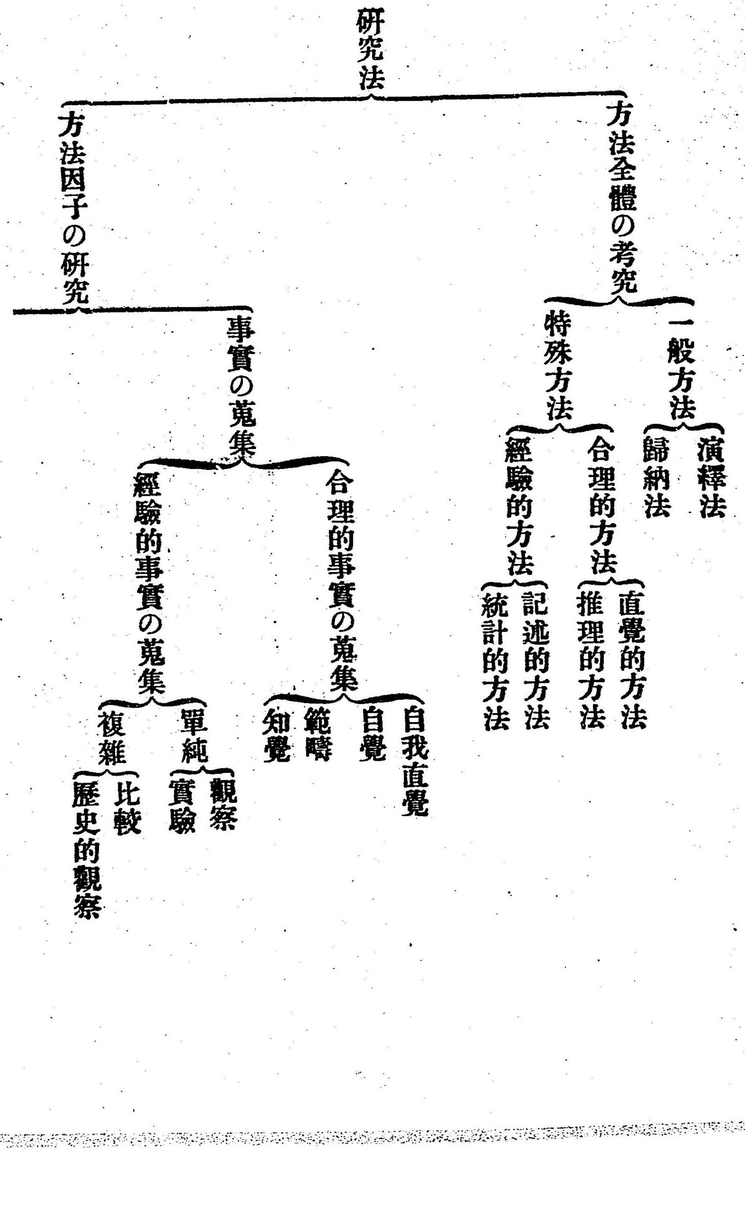
觀念運用の因子の二類四種によりて、觀念運用の系統に二樣の大別を生ず。

觀念運用の第一系統は、總合に始まり、演繹を經て、個別に至る、演繹法卽ち是なり。

觀念運用の第二系統は、分析に始まり、歸納を經て、概括に至る、歸納法卽ち是なり。

觀念運用の節目、略斯の如し、之に關する規定の精細なる取扱は論理學書に讓る。

本章を終るに臨み此複雜なる敍述の要を攬るに便せむが爲に、總攬の一表を加へむとす。



- 觀念の運用
  - 觀念の內的運用
    - 分析
    - 綜合
  - 觀念の外的運用
    - 演繹
    - 歸納
- 觀念運用の系統
  - 演繹法
  - 歸納法

第二篇　史論

溫故而知新、
可以爲師矣。

第一章　汎論

第一節　歴史的研究

歴史的研究は、科學的研究の一方法として輓近の學界に發達せる者なり。蓋し歴史的研究の稱、近時頗る多義に使用せらるゝの弊あるに似たるも、過去の事實が與ふる所を繹ねて、未來の事實が將に進まむとする針路を想像するに足る一類の研究事項あるべきは自然なるべく、且這般の方法や、其頗る複雑なる性質を有するより、諸般の研究法中、最後の發達に係るべきは、亦固に當然なりとす。

若し夫れ一旦其方法を失はむか、歷史的研究亦甚だ價値なきに了るべし。今や學問の歷史と稱する者につき、其性質目的及範圍を稽査して、其道を誤らざらむことを期すべし。

學問の歷史といふは、學問其者の性質を明にし、其第二解義を完成せむが爲に、學問に施すに歷史的研究を以てする者にして、是によりて學問の第三解義を得むと擬するが如きあらば、是れ大なる誤謬なり。[一]學問の歷史は、決して學問の內容を精細に與ふる者に非ず、其最も充全なる成功に於けるも、造詣や唯學問の外位を決定するに止まる。學問の歷史は、唯學問の發達の事蹟に鑒みて、將來學問が取りて進むべき方途を決するに參するまでの事なるは、尤も牢記を要す。

是故に學問の歷史は、其目的にして若し單に學問が過去に經歷せる所を觀察するに在りとせば、其効果や殆ど言ふに足らざるべし。學問の歷史の目的は、實に學問其者の大體の性質を明にするに存す。

茲に着目點を轉して、一般世界史の一部として學問歷史を見るときは、學問史論は文明開展の主觀的歷史の一要部を構成し、某學科の史論は、亦其中に就いて一部分を形成するの要求を有す、卽ち某學科の史論は、文明史の一部分となる。但し此を以て學問其者の研究に於ける學問歷史の性質目的と混同すべからず。

社會學の歷史は、這般二重の意義に於いて存立するを

一　然るに此誤謬は、歷史的研究を過重する弊の尤も屢〻誘致する所、尙第一篇第一章第一節を看よ。

得べく、其敍述に於いて興味多きを求めば、必ず這般の二義を兼有する者たるを要するも、今より述べむとする社會學史論は、主として斯學の研究に資せむとする目的を以てし、唯時に配するに一般文明開展史の着目を以てし、乃ち以て斯學發達の大勢を看取するに便せむと期す。蓋し歷史や、社會に於ける一事件の變遷發達を看むと擬する、必ず先づ其大勢を了得せむを要し、而して文明は社會の理想、文明史は社會理想の實現の歷史なれば、這般皆固より渾一の體たるが故に、今文明の一事象を觀取する、必ず一般文明史上の着眼を遺却するを許さず。故に社會學史論の第一意義は、必ず第二意義の幇助を須ちて始めて達せらるべき者たり。

社會學史論の範圍は如何。必ず社會學といふ名稱に拘りて、其名あるは必ず取り、名なきは必ず舍てむか、是れ迂見のみ。學問史論既に彼が如き目的意義を有す、則ち其最も重要なる事項は、發達史上波瀾曲折の際に在らざる可からず。波瀾曲折の最も著明なるは、約して左の四項に在りとすべし。

第一、學問其者に屬すべき思想の萌芽初發の時期。

第二、學問其者の成形の時期。

第三、學問の變態の時期、卽ち其面目一新の時期。

第四、學者其人に直に先たつ時期、卽ち當該學者より見て、前代及現今過渡の時期。

就中第一期は、卽ち學問が未だ完全なる成形を得ず、劃

然たる名稱を得ざる以前に屬す、故に社會學の歷史の包含は、其最も嚴正なる意味に於いて、實は其先驅となれる學問に立入りて觀察する所なかるべからず。

學問其者の目的を以て社會學の史論を試むるは、コムト其先驅たりといふべし。氏のは殆と文明史の精神の沿革を敍する心得を以て社會に關する思想學說の沿革を論せるなり。近時最も見るべきは、ル・スタイン、[二]ベエレンバッハ、[三]ハミルトン、[四]等なり。是等は皆學問の講明と、史論とを兩翼雙輪とまでに重んずるを以て、學問の體系上は過重の弊あれど、其敍述は觀るべしとす。一般に唯史的敍述の目的を以てせる者には、ヒョフヂング、[五]ジュモルレル、[六]モオル、[七]ブウグレ、[八]古くはブルンチュリイ、[九]ワイツェル、[一〇]部分的なるにはラアマン、[一一]ギイルケ[一二]あり、又法理の歷史と題して多少參考の價値ある者には、スタアル、[一三]ガイエル[一四]あり、近者フイエ[一五]の二著亦これに加ふべし。現時佛國の諸學者、氏を除きて甚だ此事項に注意せざるは微瑕といふべし。

九　Bluntschli: Geschichte der allgemeinen Staatsrechte und der Politik.

一〇　J. Weitzel: Geschichte der Staatwissenschaft.

一一　Max Lahmann: Geschichte der Souveränetätsbegriffe von Bodin bis Rousseau. 1896.

一二　P. Gierke: Joh. Althusius und die Entwickelung der naturrechtlichen Staatstheorien.

一三　Stahl: Geschichte der Rechtsphilosophie. 1847.

一四　Geyer: Geschichte nud System der Rechtsphilosophie. 1863.

一五　Fouillée: Mouvement positviste. ——: Mouvement idéaliste.

一　L. Stein: Soc. Fr. im Lichte der Phil. 1897.

二　Friedrich von Baerenbach: Die Socialwissenschaften. Zur Orientierung in der Socialwissenschaftlichen Schulen und Syetemen der Gegenwart. 1882.

三　Robert S. Hamilton: Present Status of Social Science. 1873.

四　Höffding: Geschichte der neueren Philosophie. 1896.

五　G. Schmoller: Zur Litteraturgeschichte der Staats- und Socialwissenschaften. 1888.

六　Robert von Mohl: Geschichte der Staatswissenschaft.

七　G. Fouglé: Les sciences sociales en Allemagne. 1893.

第二節　社會學史料

社會學の史料は、適當に社會學と稱する者の外、更に左の九項を包含す。是等の中には、或は正當なる學問の體統に於いて、若くは之を基とする科學の體系に於いて、一科獨立の地位を要求し得る者あり、或は學問的體系思想の混沌に際して漫然其成立を試みたる者もあれど、斯かる鑑別は今要とする所にあらず、暫く從來各科が自ら號する名稱につき、之を列擧する者なり。

第一、儒學。儒學といふ名稱は、社會學といふ名稱よりも、太だ遠き古に在りて既に定名となれる所、此兩者の間或は踰ゆ可からざる鴻溝あるに似たれど儒學の眞義は

最も含蓄的意味に於いて社會經營の問題を考察する者なり、卽ち儒學と社會學とは全く其問題を同一にす、唯其方法に於いて聊か相違ありしも、そはコムトの所謂形而上學と社會學とに於ける相違の如く大なるに非ず、乃ち儒學は、東西の古代に於ける各種の教學中、最も完全に幾き社會學と謂ふべし。社會學にして必ず歐西の學問として止まるを要すとせば則ち已む、苟くも第二十世紀世界の學問たるを要求するか、其淵源の一は必ず之を儒學に遡りて尋ねざる可からず。

第二、歷史。社會過去の歷程の記錄は歷史に在り、歷史は社會學の過去に屬する資料の倉庫なり。但し歷史家の歷史に於けるや、往往雜ふるに意見を以てせざる能はず

歷史を分ちて客觀的歷史及主觀的歷史の二種とするを得べし。客觀的歷史は、歷史上の事實といふ意味にて歷史といふ名目を用ゐる者卽ち、これにして、主觀的歷史は、卽ち文獻に編成せる歷史なり。主觀的歷史は如何に精密に、客觀的歷史と相契合するを得ず。これ卽ち史家の必然爲すところの主觀的意匠の加はるが爲に、自然に、ある程度の意匠が社會學の公準となりて、社會學の一部たるの研尋の亦やむを得ざるものあり。明治三十六年雜誌、六月發行の史學精神論、歷史研究の文明史哲學及文明史に及ぶと題する余が講演に詳にせり。

して、歷史は必ず事實其者よりも多少歷史家の意匠を加へたる事實の彙集陳列なりとせざる可からず、乃ち歷史の客觀的効力は絶對に非ず、而も這般の主觀性、卽ち意匠の理想の結晶は、是れ社會學の本體とも稱すべきが故に、歷史は間接ながら社會學の先驅なりと目すべきなり。[一六]

第三、歷史哲學。歷史の學漸く進みて、事實の彙集陳列に於ける意匠、次第に學者の眼孔に入るや、玆に二樣の方向に開展の道を分つ。第一は方法上此意匠の純粹を期し、第二は對象上此意匠の純粹を期す、而して同じく期するところの意匠純粹の理想は、人間社會の進歩卽ち是なり。甲は歷史哲學にして、歷史に於ける進歩の根本原理を繹ねむと擬し、乙は文明史にして、歷史に於ける進歩の中心事實

を敍せむと擬す。而して此理想の極致を究めむが爲に、單に歷史を以て唯一の地面唯一の資料とすることなく、廣く地面を取り汎く資料を集め、以て此理想目的に副ふべき大建築を成さむと擬する者、卽ち社會學其者なり。故に歷史哲學は、歷史と社會學との方法的中間位に在りて、多少の輔助を社會學に與へ、亦幾分か社會學の先驅となり得る者なり。

第四、文明史。文明史は、右の意味に於いて、歷史と社會學との對象的中間位に在りて、多少の輔助を社會學に與へ、亦幾分か社會學の先驅となり得れども、對象の簡選は殊に學者各個の目的に倚繫すること大なるが故に、歷史哲學に比しては幾分か社會學に緣遠きを免れず。且歷史哲學及文明史の兩者、實は問題と方法若くは性質との協合なき者、其到達の姑息的にして、諸家の遂に以て一致する能はざるは、復怪むに足らず。蓋し歷史哲學は問題と性質との協合を缺く、卽ち歷史哲學の問題は、其性質を以て達す可からざる底の者たり。文明史は問題と方法との協合を缺く、卽ち文明史の問題は、其方法を以て達す可からざる底の者たり。歷史哲學は不充全なる性質を以て、文明史は不充全なる方法を以て、乃ち社會學の問題を解釋せむとす。但し兩者の性質若くは方法を以てするも、それそれに固有なる造詣は固より之ありて、若し問題を低くし小にせむか、兩者各社會學の下に隷屬する學科たる能はざるにあらず。

歷史幷に歷史哲學及文明史と社會學との關係については、歐西の學界、紛紛として殆と暗中の兒戲を演し、第十九世紀末葉の學界の爲に、吾人をして後人に對し愧汗の背を浹すを覺えざらしむる者なしとせず。或はいふ、歷史は個人の記載に非ずして、事物の因果、社會の變遷を記する者なり、社會學といふ者豈亦此外に存立せむやと。バルト[一七]、クウランジ[一八]の如き、是なり。或はいふ、社會學は特に社會の形態を研究するに於いて歷史哲學の外に獨立すべしと。ブウグレ、ジムメル[一九]の如き、是なり。フンクブレンタノオは乃ち曰はく、歷史の理法は社會の理法と同一なり、不二なり、但しこは必ず社會學的に求むべくして、誤れる類別、誤れる類推は、最も歷史の研究の危機たりと。[二〇]フイエエも亦曰はく、歷史哲學と實理的社會學との關係を論せば、甲は結局法を代表し、乙は因果法を代表す、甲の乙に於けるは、錬金術の化學に於ける、占星術の星學に於けるが如し、甲は哲學者神學者等の神祕的詩的構成にして、乙は實理的なり、而して此結局法と因果法とは、社會的秩序において調和せらると。[二一]多少獨斷的なるの嫌あるも、見解較〻開くるに向へりといふべし。近時歐西の斯點に關する見解の標本は、更に氏がクウランジを評するに於いて見るべし。[二二]クウランジ曰はく、數年前、人の社會學といふ語を發明せるあり、抑〻歷史といふ語や亦同意義を有し、少くともそを了會する人には同事物を表する語たること明なり、歷史は社會的行爲の學にして、卽ち社會學彼自身に非ずやと。フイエエ乃ち之を評していふ、クウランジ氏が純ら歷史家にして哲學的知識に乏きを思へば、こは尤の事なりかし、歷史は社會的行爲の學なるか、少くとも學なるべきは勿論ながら、彼は唯其過去に於いて種種の形に現れし事のみを研究し、其本體自身に於いては全く研究を加へざる者なりと。冷語に酬ゆるに冷語を以てす、多くのクウランジ、多くのフイエエは、今正に冷語の應酬に忙殺せられつゝあり。

抑〻這般の爭も、亦曾て述へたる[二三]學問上無意識的積聚の弊に坐するの者にして、歷史哲學を唱ふる者始より學問の體統上斯かる學科なかるべからずとの確案ありてせる者にあらず、社會學を唱ふる者、亦始より歷史哲學といふ學科を考察に入れたる者にあらず。而して這般

[一七] P. Barth: Die Phil. der Geschichte als Sociologie. I. Theil: Einleitung u. Kritische Uebersicht. 1897.

[一八] Fustel de Coulange.

[一九] G. Simmel: Die Probleme der Geschichtsphilosophie.

[二〇] Funck-Brentano: La Science sociale morale politique.

[二一] Fouillée: Sc. soc. cont.

[二二] Fouillée: Etudes récents de Sociologie. P. 4.

[二三] 第一篇第二章第四節

が斯く相持して下らざるは、各其所屬の國を異にするに坐するのみ。社會學は獨逸之を厭うて、[二四]歷史哲學は獨逸の特產[二五]なるが故に、一を擧げて他を抑ふ、斯の如きのみ。學者亦天使に非ず、且世界は天國に非ず、强ちこれを以て學者の品位を傷くとす可からず、唯其國に生れず、其必要なきに之を猴似するあらむか、倣顰の醜態は人をして見るに堪へざらしめむとす。近時グムプロキッツ以下獨逸の社會學者、力めて歷史以下三者と社會學との關係を明にせむと擬し、而して竟に明瞭なる能はず、亦其腦力の妨害あるに察すべし。實は獨逸の學界其者に於いて、歷史哲學、文明史、各個の見解及兩者の差別及相關に關して、未た學說の一定すらあらず、[二六]社會學との對抗の如きは、少しく遷延するを得策とせむ。

歷史の本部は世界史なり。世界史は最も嚴正なる意義に於いては、史家が某國民として其空間時間に於ける全世界の具象的世界觀の表記たり。敎育上歷史の意味は、殊に此を離るべからず。乃ちランケの世界史は、[二七]獨逸民族の世界史より以上なる能はず、ドュクウドレイの文明史は、[二八]佛民羅甸民族の世界史の一部より以上なる能はず。而も是れ學者の品位の下落とはならず、唯學者自ら之を認め、之を觀る者亦特に之を認むるの要を覺識せば、玆に可なり。ヘエゲルの哲學は、應に呼びてホオヘンツォルレルン哲學といふべし、蓋し彼も亦之を認む、ショオペンハウエル等乃ち御用哲學を以て之を目す。學者救世の實用的地位を認めざる者、唯ヘエゲルが自家の地位を認めながら、尙如何にも絕對の眞理を說く面持にて大學學生に臨めるは、聊か僞善に似たるも、法官の假聲と一般、こは容すべきの僞善とせむ。最も憫むべきは豫言者を有せざる國民なり。

第五、哲學。哲學といふ名稱は、一切の學問の名稱中最も曖昧なる者、玆には慣用上哲學と呼ひ來れる諸般の內容を包含す。哲學思想が希臘以來多く社會學の先驅となる者ありしは、更に疑ふ可からず。哲學思想は、一切の學問の源流となり亦傍流となり、一切の學問は亦哲學思想の

二四　獨逸帝國の大主義は、尤も社會民政黨を容れず、其社會主義を容れざるにあらず、其民政主義を容れざるなり、是に於いて各地の大學、亦甚た社會學の講座を設くるに吝なり。

二五　Schlegel: Geschichtsphilosophie. 1828. 及 Hegel: Geschichtsphilosophie. 1838. より、續其撃に倣ふものを出たざり。

二六　例くば Lippert, Bastian の Kulturgeschichte, Henne am Rhyn: Die Kultur der Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft. Dunzig. 1890. Konrad W. Jurisch: Grundlage der Phil. der Kultur. Berlin. 1890. 等、許多の標本を具ふるを看よ。尙 Gothein: Aufgaben der Kulturgeschichte, 1889 を參考すべし。

二七　Leopold von Ranke: Weltgeschichte.

二八　Ducoudray: Histoire de la civilisation.

上流となり支流となる、社會學亦其著き者の一なり。或る國にては、哲學は次第に社會學に近つかむとし、或る國にては、依然平準の距離を保つも、哲學と社會學との益〻隔離する傾向は、世界の健全なる思想界の未た曾て示さざる事例なり。唯輓近思想界の實狀、兩者各其分野を明劃せるが爲に、或は誤りて相隔離すと見做さるゝのみ。

第六、人類學。人類學といふ名稱は、亦殆と社會學哲學の如く多義に用ゐらる。體系的人類學の果して那種の形相を取るへきかは、同學者の未た明示せざる所、今尚其先驅的發達の期にあらずや。其先驅たりし諸種の人類學中、人類の研究、人間の研究といふを以て、亦社會學に對する一種の先驅と見做すへき者尠からず。[二九]

二九　アレキサンドリアの學術が舊約書の解釋を以て人類の由來を研究せるが如き、Historia naturalis Pliny: の如き、近世に至りては Hartley: Observations on Man. His Frame, His Duty, and His Expectation の如き、殊には Herder: Ideen zur Geschichte der Menschheit の如きは、人類學の先驅より寧ろ社會學の先驅といふへき者なり。近時の人種學的研究の如きは、直に記述的社會學と密接する者なり。

第七、國家學。社會にして國家たらざる者殆と罕なり、故に國家を取扱ふと號する國家學は、亦社會を取扱ふ社會學と密に相吻合する者なきに非ず。且所謂國家學、亦頗る多種多樣なり。而して所謂國家學の大家と稱する者にして、併せて社會學の大家を以て目すべき者、亦往往之有り。社會學の先驅の一は、必ず之を所謂國家學に求めざる可からず。

國家學の名稱、亦獨逸の特產なり、而も其內容の整齊精緻、或は此國學者の頭腦に副はざる者あるに似たり。蓋し國法學は、世間或は一般國法學として踏襲する者ありと雖も、此國の學者は夙に其寧ろ獨逸國法學たるに氣付けり。[三〇]而して國法學を除ける國家學前ち一般的性質を有する獨立の學としての國家學は、[三一]專ら實用を旨とする政治學[三二]

三〇　Georg Meyer: Lehrbuch des deutschen Staatsrechts 自家の說及諸說の沿革を擧げたり 參考すべし、Laband, Rönne 等、これにつ いで可なり。

三一　Bluntschli が國家學は卽ちこれに歸す。

三二　政治學は實用上必要なる學科として、近時各國の之を研究すること益〻盛なり、而してこれを社會學の一方面とす、は Rattenhuser: Wesen und Zweck der Politik, als Theil der Sociologie u. Grundlage der Staatswissenschaften. 1893. を始め、見るべし。

に非されば、根本的に國家の體を研究するに於いて社會學の一部に歸せさるを得ず。[三三]抑、獨逸諸學者が、斯の如く國家の名稱に執着する所以は、亦學者の實地救世的方面に切なるより來れる長所亦短所にして、近時獨逸帝國一統が、獨逸民族の爲に、次いでは亦多少世界人道に貢献せむが爲に、買ひ得たる大事業の代價の學問上に於いて課せられたるは、卽ち是等を數ふべき者なり。買取の目的なくして同一の代價を拂ふは、抑、亦死馬の骨を買ふものか、蓋し似て非なる者なり。

[三三] Lorenz von Stein: Die Gesellschaftslehre. 1856. 國家學體系に於いて國家の本體を研究するは卽ちこれに沒入せさるを得ず。

第八、經濟學。最も廣き意義に於いて、國家學は國家に關する諸學科を總括せる名稱にして、斯名目に於ける特立の一學問あるに非ず、乃ち或は經濟學をも併呑せむとするも、經濟學は別に一科特立の學問として夙に成立し、而して其社會學に關係する、近時益、親密となれり。蓋し經濟學も、其始は脆弱なる假定的原理の上に立てる獨斷的演繹的學科に過ざりしが、近來人文の開展、世事の要求と共に、次第に其規模を宏大にし、其着眼を深邃にし、其方法を確實にして、今は儼然蔚然たる一大體系的學問となれり。[三四]或は社會經濟學と題して、斯幸を救濟するに進まむとす。[三四]こは學を以て社會學應用の一部門とせむとする者あり、究竟然るべきも、今俄にかくするは、斯學の獨立なる造詣を重んずる所以に非ざるべし。

[三四] L'Economie Sociale と號して、佛及英米に多し。獨にては尙 Nationalökonomie, Volkswirthschaftslehre 多きも、亦 Socialökonomie の重要なるものなきにあらず。その此名を取るもの、亦内容に於いては大に相接近しつゝあり。經濟學と社會學との關係は、Ingram: History of Political Economy 特に P. 197, 212 等を參看すべし。

[三五] これと並べて國際問題人種問題と稱する者を擧げたき事なれど、こは未た著しき社會學の資料となるべき者あらず、是等は寧ろ社會學を待ちて、始めて眞學なる、材料多き取扱に進めるものといふべし。

第九、社會主義及社會問題。[三五]就中社會主義及社會問題は、經濟學と社會學との連鎖となり、殊に其實地的解釋を要求するに於いて兩般の學問の實用的連鎖となれり。此

等の題目の下に於ける研究は、社會學及經濟學の研究を促進し、其性質を變態せること、實に極めて大なりき。今日に於いて尙世俗の社會學と是等とを混同するは、甚だしき誤謬ながら、其關係の史的重要を顧れば、亦聊か諒とすべき者なきに非ず。

斯く多樣の資料は社會學發生の以前に於ける斯學の淵源を供ふ。社會學の史論は、遍く是等に向うて斯學の萌芽を拾ひ、次に適當に社會學と名つけられたる者の發達を概觀するを要す。

第三節　社會學の發生及發達

一般に思想の開展は、無意識的より意識的に進み、意識的の開展の中に就いて更に單純意識的より自覺的に進み、自覺的開展の中に就いて復更に單純自覺的より理想的に進み、理想的開展の中に就いて亦復更に單純理想的より理想實現的即ち知行合一的に進む者に似たり。而して此意識的開展に於いて始めて思想と稱すへき者起り、自覺的開展に於いて始めて學問と稱すべき者起り、理想的開展に於いて始めて人生の學問と稱すべき者起り、合一的開展に於いて始めて社會の學問と稱すべき者起る。社會學は學問の體統上そが占むる地位に相應して、人間思想發達の最新の開展期に於いて發生す。

社會學發生の大勢上の能因は右の如し、其特殊の所緣は之を二項に約す。一に社會の渾一が識者の意識に上り

たる時、二に學問の渾一が識者の意識に上りたる時。更に之を分解すれば、社會の意識が始めて識者の意識に入り來る時、及社會の改革が必要なるの勢を呈し來る時は第一に屬し、學問の分別未だ立たざる學問的開展の初期、及學問分別の弊既に顯著となりて統一の必要明なる勢を呈し來る時は第二に屬す。社會學の發生は、斯の如き因緣を以てする者に似たり。

次に其發達の大勢を觀察するに、上述因緣に應じて大體三期に分るゝを看取すべし。

第一期、哲學的研究の時期。是れ發生の第一及第三緣に應ずる者にして、學問の分別、卽ち科學的研究未だ立たず、人生社會は漠然として其全體を觀想せられ、而して其學はやがて哲學ともなり社會學ともなる者、卽ち是なり。是時に當りては、哲學と社會學との分別は未だ全く之有らず、兩者同じく是れ學問其者に外ならず。而も思潮の特質によりて、初期の學問亦多少或は哲學的なるを社會學的なるとの差違あるを免れず。希臘、中世、支那は略之に屬す。

第二期、科學的研究の時期。是れ發生の第一第三及第二第四緣の中間に位する者にして、實は眞正の意義に於ける社會學あるなく、唯漠然たる包括的研究の效果乏きより覺醒せる人智が、各般の宇宙事象につき、知識の內容的吟味を以て內容的增進を要するより起れる、所謂部分的研究の潮流に隨ひ、社會を宇宙事象の一とし、之を對象

とせる科學的研究を成し、以て其内容的知識を獲得せむと擬する者、これ亦やがて渾一的研究の準備となるに於いて有効なり。社會學近世の發達は漸く之に向ひ、最近世に至りて全く之に陷り、而して漸く第三期に入るの準備となる。

第三期、渾一的研究の時期。是れ發生の第二第四緣に應ずる者にして、充全なる體系組織を以てする渾一的研究に向ふ者、即ち嚴正なる意義に於ける社會學是なり。最近世の終期より、將來の社會學は、應に此趨向を取りて進むべき者なり。

發達の大勢は斯の如し。史論の次序は、更に源流、成形、及將來の三綱に分ちて敍述するを便とす。

第二章　社會學の源流

第一節　日本に於ける社會學的考察

世界文明の基地は凡そ四個、我日本の文明其一なるは固より論せず、支那、印度、及歐西、卽ちこれ。就中我思潮につきて其性質を吟味するに、思想と實行との契合の完全なる、殆と他に其比を見ず。蓋し往時交通の未た開けさる、絶海の大島に國し、新舊部族の間、多少の波瀾を經て、社會一統の業乃ち成り、一樣にして單純なる民族組織の社會に

ありて、內に軋轢不穩の素なく、外に接觸折衝の緣なく、殆と人間思想の安排を加味することなくして、自然に此社會組織の後庭に生り出でたるを日本本來の思潮と爲す。發生既に斯の如きを以て、體質亦甚だ複雜なる能はず、殊に言說以て敎條の擧ぐべきは、殆ど全く缺如せるの狀なりき。既にして支那思潮の浸來あり、其粲然たる名敎は大に從來不立言說の我敎化を補うて、稍〻複雜を加ふる社會の實地に應ずるに至り、佛說亦一時人心の倦怠に乘じて入り、儒學思潮と一起一仆、而も次第に在來敎化の本義と融和を成して、以て維新の交に至れり。

是故に我本來の思潮について社會學的考察を求むれば、唯斯くして醞成せる國體の觀念卽ち是なりといふべし。家族及氏族組織の社會が、殆ど比類なき自然的經過を以て、內に擾れず、外に妨げられず、乃ち發生し乃ち發達せる渾然たる一體社會の社會的意識、卽ち是れ國體の觀念にして、能動的存在を有し、かの一時、若くは斷へず、外敵に接するが爲に生する愛國心の如く所動的なる者にあらざるなり。唯それ不立言說は亦必ず這般の事態に伴はざる能はずして、這般觀念の存在は卽ち這般行實の存在、二にして一、一にして二、是故に後人の之を摸索し之を剖析する、最も宜く鑿に過くべからず、言說の分別を要する學說の類としては、甚だ之を觀察するに便ならず。

此思潮の爲に、支那の敎學、印度の宗敎、その我社會に入り來るや、久しからずして實際化し、形式を其本地に同じ

うして、而も全く精神を異にする者となり了せり。

是故に體質に於いて最も社會學的なる社會思潮を求めば、先づ我本來の思潮を擧ぐべきも、分別計度の外に立ち、最も學問的思辨に無能にして最も直覺的感念に恰適する者は、亦此思潮を擧げざる可からず。

日本思潮について學問的に說示すべき者は唯斯の如し、儒學及印度思潮については、直に其本國に就いて看るを便とす。世界的氣運の時代なる明治の思潮についての觀察は、更に節を改めて述ぶる所あるべし。一

第二節　支那に於ける社會學的考察

一　日本思潮について較〻詳なる叙述は、拙著哲學大觀第二篇第七に在り。明治時代及其思潮は、本篇第四章に詳にす、又右書附錄第二明治思想の變遷を參看すべし。

二　第四卷に述ぶべし

三　日清戰爭以來、西人の支那に着手する者多く、輕侮の念殊に增す。獨の膠州を盜むや、其國の庸俗は更にも言はず、其學者先輩に至る、以て自國の優者なると支那の劣者なるとの覺知の基礎となし、輕侮の念益〻加はる。他邦人の彼國に在る者、彼等の後塵に咽びて、亦附和雷同、支那を輕侮するを以て

支那本來の思潮は、思想と行實との整合を以て、而もよく秩然として詳備せる思想の體系を具ふる者として、古今の思想界に獨步し、古代支那文明の特性の基礎となれり。

歐西の學者亦近時頗る支那の研究に着目せるも、研究の困難なるが爲に、其造詣は主として近時の支那に關する事項に限り、支那の古代文明に關しては頗る滑稽に類する見解尠からず、耳食の徒、或は之によりて支那文明の價値を斷ぜむとする、誤れり。現時の希臘、現時の伊太利を以て、古代の希臘羅馬を論ぜむとする、人は目するに狂愚を以てせむ、現時の支那と古代の支那と、其文明に於ける性質の差違は啻にこれのみならざるなり。二西人の研究の此尊重すべき文明に及ぶ能はざると、邦人の注意留心の現時の支那に冷淡なるとは、共に慨すべし。三

歷史に遡りて之を觀るに、支那民族遊牧の時代は卽ち

文明的學者の一態度となす。失笑の至なり。歷史の觀念に乏しきこと、蓋し其知的の原因なるべし。

伏羲氏の時にして、之に次ぎて耕作の時代に當れるは神農氏なり。此二期の時代を經、次いで出でたる者卽ち黃帝軒轅氏にして、蒼頡始めて文字を作り、文明的生活は頓に進む。乃ち衣裳を製し、宮室を作り、曆算を創め、音樂を制し、律度量衡を設く。斯かる實際に於ける國民生活の發達と直接密關して、其事其義を新作の文字に託せる者、卽ち今日吾人が據りて以て支那當時の思想を繹ぬる所の關鍵にして、支那思想の特質以て察すべく、思想や學問や、國民生活其者を離れて別に其目的對象を有せざりしを想定すべし。斯かる淵源を有する思想の漸く開展して、多少の組織體系を有する學問、卽ち所謂儒學を成すに至れる次第は、凡そ四期の發達を經たる者に似たり。

第一期、政治論經濟策。支那の太古に於ける思想の先覺者は、同時に國民生活に於ける先覺者にして、國民の安寧福祉の爲に施設せる所、一面には牧畜耕耘を敎へて民人生活の資用を贍し、一面には道義社交の道を敎へて社會的生活に於ける相互の關係を和融緊密にし、以て社會的生活の目的を達せしむ、卽ち所謂實業と所謂名敎と、兩者駢進の實は夙に之を有せり、之を支那思想發達の第一期とす。

第二期、倫理的政治的敎化。法制的敎導は稍進みたる社會に向うて唯一の治具たらざる可からず、伏羲氏以來高陽氏に至る千餘年を經て、堯舜に至るや、乃ち此進步の氣運に着目し、乃ち天理を觀察し、之に循うて治化を布く

に至れり、[四]之を第二期と爲す。

第三期、體系的敍述。禹の洪範に至りては、乃ち之を體系的敍述に顯現す、是れ實に支那古代の學問の範疇系と稱すべき者、左の如し。

(一)五行　水、火、木、金、土。
(二)五事　貌、言、視、聽、思。
(三)八政　食、貨、祀、司空、司寇、司徒、賓、卿。
(四)五紀　歲、月、日、星辰、曆數。
(五)皇極
(六)三經　正直、剛克、柔克。
(七)稽疑　卜筮、雨霽、蒙、驛、克、貞、悔。
(八)庶徵　雨、煖、燠、寒、風。
(九)五福六極　壽、福、康寧、收好、德考、終命。凶、短折、疾憂、貧、惡、弱。

洪範の包含は、獨り政治經濟倫理の事項のみならず、社會的見地よりせる天地の運行萬象の事理に於いて、其社會民人の生活に關係ある事項は、悉く之を網羅せむと力めたる者なり、之を第三期と爲す。

第四期、完全なる實現。乃ち之を充全に政教の實地に應用せるは周に在り、周二代に鑑みて、郁郁乎として文なる者、卽ち是なり、之を第四期と爲す。

斯の如くにして發達せる學問は、知る所は行ふべき所に限り、行ふ所は知る所に本づき、知を知とせる學、幷に行を行とせる實地的經營は、支那學問に於いて決して之を

[四] 堯曰、咨爾舜。天之曆數、在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終。(堯典)

看るべからず、所謂知行合一は、支那學問の正徑に於いて。啻に個人的原理なるのみならず、亦實に社會的原理たり。し者、道と事とは本來分存すべき者にあらず、帝王といひ、聖人といふ、固より二者を兼ぬる者の稱なりき。其後次第に陵夷して遂に孔子に至り、其道を得て其位に當らず、而して學問の性質茲に一大變遷を成し、事を離れて獨り道を傳ふる者、後世の所謂儒學[五]の濫觴となれり。

支那の文明は、理想の託寓、無何有の規範を以て儒學を視、聖人の道をば一種超絶的不可到的實在と思惟するに至りて、一頓して復進まざるを致せり。乃ち儒學の講明は奕世綿綿として斷へざりしも、社會文明の進歩に直接密關することと復當初の如くならず、加ふるに不幸にも此超絶的學問が學問界の唯一の者となり、人間知的發達の標徴亦單に之に由るに至りて、支那古代文明の實質、學問本來の性質に固有なる重要の意義は、全く之を喪失するに終へたり。

社會學上重要なる觀を爲すべきは、此學問本來の性質、及其支那古代文明との關係、是なり。

第三節　儒學

斯の如くにして發達せる儒學精醇の內容について、社會學的考察を下さむか。

儒學は近時哲學研究の隆運に伴うて支那哲學の主要なる一部門とせらるゝに至れるも、歐西及印度の哲學に

五　孔子の言に、女爲君子儒、勿爲小人儒とあり、儒學の目は漢代に起る。

六　科擧の法は實際に於ける其一適例なり、支那思潮の變衰には此法與りて大に力あること、世の定論なるが、其理由は實に地的社會に取りて超絶的となれる學問につきて對象を取れるが爲にして、必ずしも試驗法其者のみの失にはあらず。

固有なる形而上學的講明の方面は、儒學の本來最も短とせる所、寧ろ學問の橫流として甚だ之を重んぜざりき。夫子の性と天道とを言ふは得て聞く可からず、子罕に利と命と仁とを言ふ、已に生を知らず焉ぞ死を知らむ、等の語は、實に儒學本來の面目なりと稱すべし。大凡そ儒學の目の下に集まれる敎學は、兎も角も皆支那本來の學問を理想として研修せる者、後世宋儒に至り、頗る形而上學的講明の方面を發揮して、性理の說、其辨錙銖に達せるも、儒學の本體の講明に於いては、曾て孔子より以上一步なること能はざりき。本來の面目に於ける儒學は、哲學よりも寧ろ社會學なり、其純ら社會經營を目的とするに於いて、其直に人生の理想を求むるに於いて、儒學は寧ろ社會學と呼ばるゝに恰適す、殊に輓近社會主義の發達して、其究竟の解釋を社會學に求むるに至れる、儒學の社會學と呼ばるべき要素に向うて、新に一點を添へ得たるを疑ふ可からず。

儒學の社會觀は健全なる常識の社會觀なり。一句以て全幅を蔽ふに足るべく、儒學の長短共に匿す所なし。蓋し儒學の社會を觀する、凡百自然科學の發達せる今日と異なりて、堅確なる科學的基礎の上に精密なる社會組織の學說を打建つるは、其能はざる所なりき。而も科學や亦其充全なる發達に到らざる、往往不醇にして荒誕なる臆說を交ふ、社會學に與るべき星學、地質學、生物學、人類學、等に於いて殊に此弊は大なりき。儒學は是等科學の長を集む

ること能はざりしも、亦其短を復たびするの弊に陷らざりき、儒學の社會觀は直に社會をそがあるまゝに考察し、經驗を日常の生活に置き、日常の生活によれる見聞の範圍を、更に時の悠久に沿うて歷史の遠源まで擴充し、人間直接の經驗たる歷史の記傳以上に遡りて、强ひて其幼稚なる考究を附會することを爲さず。是故に儒學の社會觀は、幼稚不備と狹隘不洽とは卽ち之有るも、其措定せる教說は、健全なる思想界が到底拒否す可からざる底の者たり。後世學問の發達と共に、學者の新に希圖すべき事業は、これを拒否するに存せずして、これが不備を補ふと、研究法の變革とに在るべき者なり。

儒學は人間社會の起原について格別の說明を與へず。

七　若し近代の文明及其學風に比儗を求めむか、支那周代に至るの文明は、以て英國の文明に比すへく、殊に本來の儒學の學風は、これを英國の學風に比すべし。

天烝民を生ず、物有れば則有り、民の彝を秉る、是の懿德を好す、といふが如き、儻くは以て此教說に充つ可けむか。而も儒學は社會の原子たる人の生成の由來を說かず、隨つて人種起原の說明に立入らず。儒學は又抽象的社會を取扱ふに遑あらずして、直に國家としての社會を取扱ふ、卽ち儒學の社會學は國家社會學とも稱すべし、人と謂はずして民と謂ふ、既に國家的分別の生じたる以上の社會なるを意味す、而して此君民の區別は、社會といへば必ず之有る者と信じたり。惟天地は萬物の父母、惟人は萬物の靈、亶に聰明、元后と作る、元后は民の父母と作るといへる、天地の何處より來る、萬物、人の如何にして成立する、これらは一切疑問とせず、唯衆人の中に就いて、一個聰明にして

優勝なる者、乃ち元后となり、治者となり、天地の萬物を化育するが如く、父母の兒子を撫育するが如く、人の萬物の靈たるが如く、其靈覺を以て、其慈愛の心を以て、之を率ゐ之を導く者とせり。而して這般君民の分別、亦其如何にして成るかを問はず、契約說、戰鬪起源說の如きは、未だ此間に生ずるを要せずとせしなり。

社會は人と人との協同生活の場なり、其構成を査定して、儒學は五種の關係に本つくと爲せり、君臣の關係其一なり、夫婦の關係其三なり、長幼の關係其四なり、朋友の關係其五なり、這般五種の關係は是れ人の相集まりて社會を成す所以なり。人と人との關係は、單に二人者の關係を以てする者も、社會の人員をnとすれば、其數$\frac{n(n-1)}{12}$なるべし、而もこれを各人の道德上社會上の地位より見れば、實は此五種の外なしとせる、是れ儒學の社會靜學的根本原理と稱すべく、根本的社會組織卽ち是なり。乃ち斯かる人人の社會的關係上より、關係の規定たる道德の原理亦五類を生ず、君臣の間には義を以てし、親子の間には親を以てし、夫婦の間には別を以てし、長幼の間には序を以てし、朋友の間には信を以てす、之を名づけて五倫或は五常といひ、就中君臣親子夫婦の關係は卽ち一切の社會關係の本源たるを以て、特に之を三綱と名つく。三綱五倫は社會上の事實なり、卽ち以て事實と爲して復其生成由來を論究せず、强ひて其認識の方法次第を問へば、是れ卽ち經驗が指示する事實なりといふに止ま

九　三綱の名目の古さについては、紛々として諸說あるも、今唯儒學の性質上よりこれをいふ。

る。夫れ五倫を以て必要充分なる要素として構成せる社會は、卽ち國家社會なり、國家社會の中には、家族あり、個人あり、這般皆國家社會の中に運營し、國家社會亦天地の裏に運營し、而して發達し、而して隆替興亡す。此隆替興亡の原理を取扱ふ者は、卽ち儒學の社會動學にして、周易及春秋の二書は最もよく之を顯現す。

就中周易は直に宇宙全體について其動學的原理を明めむとし、春秋は純ら國家社會について其隆替興亡を明にせむと擬す、是故に周易は後世の所謂支那の哲學なる者の元祖と稱すべくして、春秋は其所謂歷史なる者の元祖と爲る。周易の國家社會を觀るや、之を大にして宇宙全體、之を小にしては家族及個人、其消長の運命を觀する、全く同一の觀法を以てし、同一の原理以て之を律する者と爲せり。這般の根本原理は卽ち所謂變易不易の理にして、約して之を易理といふ。易理の包含する所甚だ多端、今之を詳述するに堪へず、暫く其大綱を概要せむか。(一)天地、國家、家族、個人、卽ち宇宙の萬有及宇宙の全體は、生生の德を具ふ、乾の德卽ちこれ、人に在りては、乾乾自彊の道となる。(二)宇宙の事物に消長の理あり、盈滿缺損の義あり、勢卽ち自然の徑行に放任するときは、初は中を生し、中は終を生ず、卽ち物の始めて生ずる、之を長成する所以の者、これその中盛に達するに及び、これをして過滿變衰に至らしむる所以の者なり、二之を調攝して自然の勢の盲動に任せざるは、人が一身を處するにも、聖人が國家を經營するに

乾の卦象にいふ、天行健、君子以自强不息。文言にいふ、夫大人者與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶、先天而奉天、後天而奉天時、天且弗違、而況於人乎、況於鬼神乎。

一〇

地天泰、及天地否、井に山地剝、及地雷復、を以て尤著明なる例と爲す。剝の彖にいふ、剝也、柔變剛也、……君子尙消息盈

一一

も、毎に必要にして、後世陸王の徒が、勢に對して理と謂ふ所の者、卽ちこれ、而して絶對理の用に外ならず。(二)這般事物の運行や、理勢の要義や、皆是れ宇宙不易の道なり、不案の理なり、所謂天道言はずして品物享る、(二)卽ちこれ。是故に易は特に近世の進化論を有するに至らざりしも、其社會動學的考察は、自ら一派の組織を有して、宇宙人世一貫の動學的理法を繹ね、之を得る者は存し、之を失ふ者は滅ぶ、個人と國家とに論なしとせる者若し夫れ春秋は、卽ち更に各個の國家各個の個人の各個行實に就いて、其得失を稽へ、其隆替興亡する所以の理を明にせる者にして、聖人の敎を寓するに於いて深切著明なりとする所以、五倫の道、易の理に於ける成敗得失をば、行實に就いて裁判せる

(一)虛、天行也。復の象にいふ、復亨、剛反動而以順行……復其見天地之心乎。

(二)天何言哉、四時行焉、百物亨焉、天何言哉。

(三)春秋尤も尊王斥覇の義を明にす、是れ卽ち不偏不黨なる天の明命により、四海の輯睦、卽ち國際平和の大義を掲くる人道の大綱領なり。

者なりとす。(三)後世前漢の司馬遷、周公孔子の後を繼ぎ、斯學を著したる、亦孔子の春秋を紹ぐの徽意に外ならざりしなり。

第三期の興隆者を以て自ら任し、史記に於いて其一家の

儒學の社會觀や、頗る發達の域に達す、而も皆是れ社會的生活に於ける實地の必要より起り來たる者、到底簡約にして悉す可からざるも、其大綱は略、右の如し。周に於ける充全なる實現、その法制となりて現れたる者は、卽ち禮なり、禮を案して儒學の社會觀實用の大體を知るべし。是より其後、儒學の發達は頗る其正徑に迷ひ、一轉して漢朝訓詁の學となり、再轉して宋代理氣の說となり、三轉して清朝考證の學となり、本來の面目を發揮する者、寖く以て

亡ぶ。唯歷朝社會經營の途に當れる者、皆其學識を此に求め、學弊の深淺は暫く措き、其得喪は永く社會の隆替に關したりき。

抑、儒學一たび其極盛の域を經て春秋戰國に至り、周室の陵夷と儒學の衰運と相伴うて、所謂九家の學茲に生じ、儒學亦這般と轡を駢べて相驅馳するの匪運を趁へるも、其所謂九家なる者の中に就いて、名家の名教儀法を以てする、法家の法律刑政を以てする、縱橫家の國策を以てする、雜家、農家、兵家の各社會經營の一部に着眼せる、皆一偏の弊あるも、尙實地社會の經綸を離れざるは、亦以て儒學の影響寧ろ支那思想本來の趨嚮が社會學的なりしを察すべし。九家の中、獨り道家の本體探究に趁れる、陰陽家の宇宙觀察の發揮に忙しき、頗る既に儒學の正徑を離れて遠く幼稚なる形而上學的闡明の方途に向へるも、こは學問の一たび衰へて分派の事起るあるに際して毎に視る所、特に異とすべきにあらず。儒學の對象は其本來の面目に於いて純ら社會學的なりしこと、大學の三綱八目[一四]、中庸の第一章[一五]、亦よく之を明にす、乃ち所謂天地の化育に參する所以なり。其末流や、此大なる範疇に達するに足らず、僅に一斑を得て以て全豹を爲す、論ずるに足らざるなり。

哲學を以て儒學を視る、宋代以前、合格する者幾と罕なり。近者西人の實理教を奉する者、亦孔子の說の自家の信仰に契合するを稔聞して、竊に之を慕ふ者あり[一六]、規矩を以て窺天の管と爲さず、乃ち其れ庶幾からむか。[一七]

一四　明德、親民、至善。これを三綱とし、格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下、これを八目とす。

一五　天命之謂性、率性之謂道、脩道之謂教：天地位焉、萬物育焉。

一六　ケエリイ、ハリソンの如き、其錚々たるもの。

一七　吾曩に陸象山を著す、一二の批評に於いて、同書が政治經濟の法律と題して顯現の事を設けたるは全く蛇足なり、哲學の章乃ち足ると呼、某をして哲學者と目し、乃ち其哲學說の外は一切閣くに足らずといふか、科學的研究の弊、何ぞ一に此に至る。

第四節　印度思想と社會學的考察

東洋文明の本源に在りて、支那の教學が古代世界の思想の中最も社會學的の性質を帶べるに對し、世界に於いて最も非社會學的の性質を具ふる者を印度思潮と爲す。這般兩極の性質を有する思潮が相隣接して東洋の二大老國に起りしは、頗る奇とすべき事實なり。抑、印度や亦世界文明の一大中心點、而して我邦の文化に影響せること極めて大、乃ち其思想の性質や効果や、決して等閑の觀を爲すべからず。

一括して斷ずれば、印度の思想は全然宗教的形而上的なり、印度の歴史は宗教の歴史なり。今復之を其社會の成立に觀、其思想の性質に察せむか。印度古代の社會は四種の階級より成る。一を婆羅門とす、卽ち智者又は詩人の義にして、神人の間に立ちて調攝の大任に當る者。二を刹帝利とす、卽ち王權兵力の義にして、政治的治者の地位に立つ者、但し此國特殊の政治統制に準じて、其地位も亦特殊なり。三を毗舍とす、卽ち人民の義にして、兵事に關する者。四を首陀とす、卽ち百姓の義にして、農工商の事に當る者。這般四種の階級の中、上の三者はアリアン族にして征服者なり、第四の首陀は異族にして被征服者なり。印度は本來標本的の神政政體にして、此世に於ける統治權の本源は全く神意に存す、是故に神意を人間に通ずる者卽ち婆

羅門は、斯かる社會に在りて最大優勝の地位を占めざる能はずして、此權力者が發する信仰の光明なる婆羅門教は、因となり又果となりて社會に絶大の效果を成しなり。

婆羅門教の宗教思想を要約すれば、最上の單一靈神を立する複一神教[一八]にして、此最上靈神は活力善良暗黑の三德によりて、分れて三神を現す、造化の神なる婆羅賀摩卽ち梵天、保持の神なる毗溼奴、及破壞の神なる溼婆、是なり。一切の諸神は皆此最上靈神の顯現なり、各自の精神も、一切の物質も、皆此神の顯現にして、同じく不生不滅なり。精神心意と結合して身體に入るときは、快苦を生じ、自他を生じ、善惡を生ず。凡そ作業の關係は卽ち因果なり。吾人が

一八　Max Müller の所謂 Cathenotheism.

最上優妙の地位は、這般快苦自他善惡なきの境地に在り、卽ち此に達せむが爲には、精神心意及身體の結合を解くを企圖せざるべからず、此企圖は善行及苦行を修する事によりて行はる、其效果は解脫なり、其境地は涅槃なり。此結合を解き得ざるときは、神位人位及獸位の間に輪廻を成す。善行の主なる者は、情慾を絶つ事[一九]是なり。人間死後の居處は、解脫の有無及程度によりて、種種の天堂地獄なり。是故に天堂、地獄、輪廻、解脫、涅槃の思想、唯心的複一神教の世界觀、及厭世的人世觀は、印度思想の本來に有せる所にして、蓋し人種に固有なる超絶的信仰心、及其四圍の地學的關係、乃ち之を馴致せる者なるべし。二者一あるも、其思潮は以て非社會學的たるに足る、況や兼ねて之を有する

一九　四圍の地學的關係が、這般宗教觀に如何に影響せるかは此に察するも以て思半に過ぎむか。

をや、其効果は社會を以て假託となし、人生を以て浮象と爲し、而して其思想や唯人生社會を脱離するに急なり。這般の宗教思想、亦固より人生分内の事、社會界内の事たるも、抑學問は意識的自覺的思想の開展に於いて始めて之を看るべき者にして、斯の如く力めて人生及社會を其自覺より其意識より排除せむとする社會には、到底人生及社會の學あるを得ざるなり。社會學なき印度の社會は、亦歷史なき社會なり、國家なき社會なり、而して竟に社會の崩解に了る、憫むべき結果といふべし。卽ち反面より社會學の歷史を現するに於いて、印度思想と斯學との關係の講明亦興趣なしとせず。

是より其後、漸く所謂六派哲學の興起あり、[二〇]其他闍伊那の二元論、斫婆迦の唯物論的反動たる欣世教あり。是より先、刹帝利族の興起の勢、印度社會の一革命を要する時勢と相應じ、加ふるに蓋世の英傑釋迦牟尼の出づるを以てし、卽ち佛教の興隆ありしも、婆羅門教の宗教思想は實に印度思想の髓腦にして、其本來の性質はこれが爲に曾て大なる變化を受けず。佛教の殆と全く這般印度的性質を脱するに至りしは、支那を經、日本に入り、許多の發達變態を經たる後に在りとす。

二〇　六派は左の如し。尼夜耶派の辯論術、勝論派の多元論元子說無神論、數論派の二元論、吠檀達派の超絕唯心論、弭曼薩派の作法、瑜伽派の冥想及苦行、これなり。

第五節　希臘に於ける社會學的考察

歐西の學問は、其淵源を埃及及アッシリアの文明に發す

るを以て、其歷史的考察を試むる、宜く這般の遠き古に遡るを要すべきに似たるも、今に於いて文獻の徵す可き者勘く、西亞の文明の歐西文明に影響せる、悉く希臘羅馬を介するを以て、今歐西文明の概目の下に於ける社會學の源流を探る、亦希臘に始むるを適當とすべし。

希臘の學問は、支那の學問と異にして、人生社會に直接に關涉する問題に其起源を有せず、所謂アイオニアの哲學者の學問思想は、單に所謂知識欲の爲に其學問思想を開展せる者に似たり、哲學の開展せるや、後世に至りて學問の首腦たるの要求を爲せども、當初の希臘哲學は、人文開展の上に於いて唯源流の一たるに過ぎず、乃ち今希臘學問思想の淵源を究むる、約して之を四項と爲すべきなり。

第一、詩歌的想像の構成。ホメロス、ヘシオッド、オルフェウス、及フェレキデス[二]の、人事及神事に關する、韻文及散文の形に於ける、詩歌的想像は、遠き古に在りて、或は直接、或は間接に希臘思想の開展に影響せり。社會自然の要求により、民族的經驗の積聚より發達せる、社交上の規定たる、俚諺格言の類は、直に實行的訓言として、少からざる勢力を有したる者なり。是等は凡べて西紀前六〇〇年以前に在り。

第二、政治家の立法。統治的經驗の積聚を充分に自覺し、之を判明なる法制に制定せる者を、政治家の立法と爲す。第一項は社會的なり、此第二項は政治的なり、此二項の事、相俟ち相合して、希臘社會の意識的存立は茲に全きを

二　此事については Ueberweg: History of Phil. Vol. I. P. 24 (英譯) を參看すべし。

得るに至れる者。西紀前六三九―五五九の間に生存せるソロンの立法は卽ち其嚆矢にして、亦以て希臘古代法制の代表と見做すを妨げず。ソロンは希臘雅典の立法家にして、社會的敎育者なり、夙に民政主義を顯揚し、希臘的政治主義を最もよく發揚せる者なり。

第三、哲學的思潮。此頃に際して更に所謂知識欲の發展指示に隨ひ、單に實地の社會生活が必要とする範圍に局促せず、直に宇宙の第一原理の探究に向うて程を發せる者をアイオニアの哲學者と爲す、これ希臘に於ける哲學思潮の嚆矢にして、其動機や純ら知識欲に在り、其思想や專ら自然觀察に在り、第一項及第二項とは、截然として分別ある範疇と方向とに於いて、特殊なる思潮の開展を

效果せる者なり。

第四、歷史的觀察。實地を離れて、單に思辨の方向に流るる、固に健全なる學問思想の發達を促す所以に非ず、卽ち玆に歷史的事實觀察の事に從ふ學者の起るあり。希臘最古の歷史家と稱せらるるヘロドトスは、西紀前四八四―四〇八の間に生存して、社會生活の經驗に學問的生命を與ふるの使命を成せり。此第三項及第四項の具足を以て、希臘思潮に於ける知の方面も、粗、其體を具ふるに至れり。

這般四項の淵源より發達し來れる者は、卽ち希臘の學問思想其者にして、四條の源流次第に發展を遂け來るや、漸く相近接して、今や一大手腕の出つるあらむか、渾蕩融

合、玆に思潮の一大壯觀を効果するの氣運に向へり。ソクラテエスに起り、プラトオンに成り、アリストテレエスに大成せる教學は、卽ち此氣運に乘して成功せる事功に外ならず。

ソクラテエスは西紀前四六八―三九九の人にして、粗其時代をヘロドトスと同じくす。氏は人間を對象とし、觀察を方法とするに於いて、一方にはソフィスト派の哲學思想を享け、一方にはヘロドトスの歷史思想を承け、其對象及方法に於ける、旗幟を鮮明にして、希臘思想界の一大改革者となれり。氏は又其資料として古來社會に傳はれる俚諺格言の類を攝取し、其教を垂るる、自ら亦俚諺格言の形式を取り、卽ち此の如くにして淵源の第一項をも攝取せり、

ソクラテエスは斯く前來諸種の淵源を一家に集めたりしも、第二項のみは未だ之を收むるに及ばざりき。理論的思辨と事實的觀察との二方法を合せ、社會的規定に加ふるに政治的統制を以てし、渾然たる一體として社會人生を考察し、理想と實現とに遍滿にし、根本的研究を以て之を結果せる大哲は、實にプラトオン其人を待ちたりき。プラトオンに於いて希臘の學問思想は精英の極に達し、而して遠く歐西に於ける社會學の鼻祖を成せり。[三]

プラトオンの學問は、人生及世界を根本的に觀するより起りて、社會人生の究竟的理想を構成するに了る者。其理想の根基は、觀念說及思慕說に在り。觀念說とは如何な

三　プラトオンの出生は、西紀前四二七、五月二十六日又は二十七日といふ說と、四二八、六月五日又は六日といふ說とあり、その死は三四八、又は三四七なり、

る者ぞ。吾人は相類似する衆多の個物を概括抽象して概念を有す、概念は主觀的心的表象なり、鏡の物を映するや、物あり而して像あり、今概念は像の如く、心は鏡の如し、必ずや外界之に應ずる者なかるべからず。所謂外界とは何處の界ぞや、吾人の感覺に入り來る有形世界は、概念の資料を供する個物の世界なれば、是れ此外界に非ざること明なり、則ち所謂外界は、別に一種の世界にして、此處に所謂物なる者存す、此物を名づけて觀念といひ、此世界を觀念世界と謂ふ。吾人の有形世界に於ける個物は、此觀念の寫象に過ぎず。觀念は個物に非ず、個物は觀念の模倣なり。衆多の觀念の中に就いて、最も崇高なるは善の觀念なり、是れ卽ち神なり、卽ち精靈なり、卽ち世界の支配者なり、各個の觀念は、之に應ずる各個物の標準なり、觀念は圓滿完全なる個物なり。有形世界は圓滿完全ならざる個物世界なり、卽ち有形世界に在る吾人人間は、須く之を脫離し、觀念世界に向うて精進せざる可からず。有形世界は見在なり、觀念世界は理想なり、見在を棄てて理想の實現に力むるは、卽ち愛なり、卽ち思慕なり、義務の逼促あるに非ず、快樂利益の好餌あるに非ず、中心思慕の至情、乃ち人を促して觀念世界の圓滿に向うて精進せしむと謂ふ者、卽ち。プラトオンの有名なる思慕說なり。其善美合一論の如き、亦斯に基づける者とす。

斯かる觀念論よりプラトオンの世界觀は立せらる。[三] 世界は可見世界及可知世界の二面を有し、甲は空影、寫象の

[三] Republic, VI.

世界にして、感覺及信仰之を支配し、乙は觀念によりて存する實體の世界にして、悟性及理性之を支配す。

卽ち眼を放ちて希臘當時の社會構成を看れば、階級上の社會問題あり、[二四]政治主義上の問題あり、[二五]爭衡縱橫の國際問題あり、[二六]美皆是善[二七]の獨斷教の下に持せらるゝ風俗問題あり、實に斯哲人の眼に映せる當時の社會は、殆ど唯弱點と闇面とのみより成れりしなり。是に於いて氏の理想的社會を顯現せる者を共和國篇[二八]と爲す。蓋し當時希臘の宗教及道德的觀念に於ける社會體制の支配的原理は正義にして、正義は固より善德の高き者、而して之が執行に堪ふる者は、所謂英雄卽ち是にして、國家は英雄の養成と民人の營生とを目的とし、英雄養成の機具としては神學、文學、及體操を用ゐ、其方針としては智慧、勇氣、節制、及正義の諸德を奬勵す。然れども、斯の如きは尙未だ國家社會の上乘なる理想と爲すべきに非ず、理想的國家は宜く哲學の國家なるべし、國家を統治する者は哲人にして、至善の理想を明らむるは、當時の所謂社會的政治的德義の上に立ちて、統治の大主義たらざるべからず。國家は一大共同家族なるを要す、夫婦は個人的に一定せず、兒子は皆骨肉たるべし、而して其首長は哲人なり。哲人とは何ぞや、[二九]哲人は一切の美德を具ふる者なり、哲人は敎養によりて成る者なり、可知世界を知了して、至德要道を具へ、其睿智を致すは實に辨證法[三〇]に由る。辨證法は哲學の最高部門にして、此に由らざれば以て賢哲の極地に達す可からず。哲人の國

二四　Phaleas は當年の社會主義を代表し、Heraklcitos は貴族主義を代表す。

二五　眞人政治と民主政治、Aristides と Themistocles との如き、人の皆知る所なり。

二六　ヘゲモニイ、卽ち覇者の存在を以て、僅に國際の秩序を維持す。

二七　カロカガチアは、凡そ美なる者は皆善なりと爲すもの、希臘社會一般に之を信ず、プラトオン乃ち之に反對して、善卽是美を立つ。

二八　The Republic.

二九　Republic, VI.

三〇　Dialectic.

家を治むるや、天の範型に仍る。[三一]夫れ至善は決して快樂に存せず、亦單に知識に存せず、[三二]至善は人を率ゐて神に酷似せしむるに在りて存す、而して人の性や實に此に適應する者なり。[三三]是に於いて哲人即ち圖版を淨拭し、次に上下を觀察し、[三四]天に於ける絶對的美德を取りて之を人に於ける寫象に擬し、生命を與へ、神靈を賦し、以て民人を大成し、以て社會を肇治し、終に以て憲典を作成して、乃ち範を不朽に垂る、而して哲人の事終る。

プラトオンは伊太利の大希臘[三五]に於いて、[三六]多少其理想的國家を實現せむとせしも、數多の困難は常に之に伴へり。氏は二回此地に赴きて、未だ其志を行ふに及はず、而して其友ヂオンの死あり、時に氏亦年既に六十一、氏が哲理を以て人間社會直接の勢力に擬するの希望は、全く此に絶ゆ。[三七]是に於いて法律篇の著あり、謂へらく、至人の出つるあらむか、其術や卽ち天理にして、以て儀範とすべきも、至人出でずんば、完全なる國家は得て企つ可からずして、而して第二位の法治的國家を要すと。是に於いて氏も亦漸く當時希臘社會の通準に接近するに至れり。

プラトオンの社會學的考察の效果概ね斯の如し、其造詣は後人亦軼くる能はざる所なるも、唯其根本を立するに於いては、則ち純然完全なる形而上學的考察の標本にして、實に此民族の思潮に固有に、支那思潮に全く缺如する所の者、後世コムトの出つるを竢ちて始めてこれが救濟を全うせる者なり。[三八]然るも二十年の上に出で、純潔

三一　こゝに至りて其支那の教學と近似を看るを禁ずる能はさるもの。

三二　功利學者、知識欲學者、戒むる所を知るべし。

三三　中庸首章と比較すべし。

三四　所謂仰觀俯察か。

三五　Grote : Plato. 3 vols. vol. III. P. 302 -.

三六　氏は Syracuse 王 Dionysius と共にせり、

三七　氏の成功の孔子よりも少かりしは、其餘りに形而上的なりしこと、一大原由たり。

三八　獨逸中世紀前最大の世界史家 Schlosser は其大著 Weltgeschichte 中、支那を敍していふ、此民族はあらゆる Gemüth を缺く、故に高尙なる信仰文學等は此民族の解せざる所なりと。思想家的價値なきものが史家として不完全なること、これを以て適例とすべし、蓋し千里の目を窮めむと欲せば、更に一層樓に上らさる可からさるなり。Ed. I. P. 12—27.

高尙にして圓滿なる理想を明らめ、以て百世の光明となりしは、氏や自らの所謂哲人となるに成功せる者といふべし。[三九]

プラトオンの後にアリストテレエスあり、[四〇]哲學上には、プラトオンの觀念說を紹述し、觀念の超絶的存在を轉じて、事物の內包に存する者と爲し、以て有形世界の說明となす。氏は物の存在に眼を注ぎしのみならず、亦其發生を探討し、乃ち進化の原理を提出して以て一般有形世界の現象を說明せり。其方法は、普遍と特殊との關係を吟味する論理學[四一]に存す。其人間に關する學說は、倫理及政治書[四二]に存し、而して政治書は倫理を根基とす、以爲へらく、人は本來の性より既に政治的實在なり、國家に非されば以て倫理問題を解することを能はず、國家の起源は人生の保護に在るも、其目的は人生の進步に存す、進步の第一義は德性の修養に在り。全は分に先だち、目的は手段に先だつといへば、國家は個人に先だつと謂はざる可からず。國家の基礎は家族に在り、强ひて個人的利害を絕するは、必ずしも國家的統一の原素に非ずして、感情の一和は最も必要なり。國家の實施的形式は、君主政體、貴族政體、及民主政體の結合に存すと。氏の學は希臘思潮に富贍を與ふるに於いて偉功ある者、其社會學的考察は、方法的に進步し、理想的に退步し、而してプラトオンよりも一層當時の社會に接近せる者とす。

希臘思潮の汐退の時期に於いて、ストア派及エピクル

三九　Nietzsche の Uebermensch, Carlyle の Hero は、氏自身に於いて見るべし、Zeller の徒、欽仰して措かざるも、宜なり。

四〇　西紀前三八四―三二二

四一　Organon.

四二　Nicomachean Ethics.（自著）Eudemonian Ethics (Eudemos の記せる者) Magna Moralia（上二書の抄記）Politica.

派は、社會學的考察に於いても亦反對の見地を取れり。甲は社交性を人の本性なりとし、乙は之を非本性とし、人は本來に於いては相殘賊する者と爲す。甲は人を神性とし、乙は獸性と見做せり、新プラトオン派に至りて、プロチヌスはプラトオンの共和國を建てむとせしも、時代亦後れて、事益、困難となり、其計圖の失敗と共に、希臘思潮の社會學的考察は了る。

第六節　中世に於ける社會學的考察

近時の史論の一致する如く、[四三]古代歐西の三文明民族に於いて、希臘は社會の哲學的考察を與へ、羅馬は法制的經營を供し、而して猶太は宗教的信念を賦す。其效果は、希臘の哲理的社會主義、[四四]羅馬の農政的社會主義及猶太の宗教的社會主義なり。然るも羅馬の造詣は、學理上甚だ重要ならず、猶太の造詣は、其所産の基督教といふを以てする外、大に注意の價あるを得ず、希臘の造詣のみ獨り吾人今日の研究上不可避の重要あり。蓋し今日の基督教は、漸次諸般の教說を攝取して以て成り、甚だしきは進化論も基督教の含蓄なり、社會學も基督教の含蓄なりといふに至りて、基督教社會學及基督教社會主義の目を生せるも、本來の基督教は飽くまで超絶的信仰なり、其對象に於いても、其方法に於いても、全然社會學的考察と相關せざる者、殊に其論理、其教說の、單純にして粗雜なる、印度哲學に於け

[四三] S. stein: Soc. Frage im Lichte der Phil. P. 832.
倘羅馬については Röm. Mommsen: Geschichte, II. 4 Buch. Cap. III. Rodbertus: Zur Geschichte der agrar. Entwickelung Roms. Jahrbuch f. Nationalökonomik u. Staatswissenschaft 1864 を參看すべし。

[四四] Philosophischer Socialismus.
Agrarischer 〃 〃
Religiöser 〃 〃

るが如く間接の思想資料としての貢獻をも斯學に供するに足らざる者なり。數世紀の後、漸く新プラトオン派の教義を攝取するに及びて、プラトオン教學の光明は微に此間に閃き、其次第に發展せるもの、適、近時の社會問題に對する此宗教の要求の素地を成せるのみ。

中世に於ける思辨的生活は、所謂師父哲學及煩瑣哲學あるのみ、其最も著明なるをトオマス・アキイヌスと爲す。[四五] アリストテレエスの人は國家的實在なりと謂へるに附加へて、氏は謂ふ、[四六]人は社會的政治的動物なりと。蓋し中世の思辨が、國家と謂はずして社會といふは、其超絶的信仰の思想を以て、國家をば究竟に絶對に重要の者と爲さざるに基づく。人間には社會的體制の要あり、又之を規定する統治の要ありと爲し、人間生活の最大目的は景福の增進に在り、若し此目的にして人間の德性によりて達すべくば、君主は民人を導きて之に到らしめざる可からず、而も是れ實に人の手の能くする所にあらずして、實に神の嚮導を要するが故に、國家の統治者は必ずや神人の間を司る所の法王に隨從するを要し、而して國家は教會に隨從するを要すといふ。諸、の學者[四七]皆これに和して、以て中世の神的國家說[四八]を成せり。

中世思潮の正教といふべき此神的國家說に對して、稍、自由討究的精神の發動と見るを得べき者、二流あり。一はアラビアの思想家なり、[四九]其首領として、アヹロェスは謂へらく、人間道德の見地よりすれば、一切の宗教は同しく皆眞

四五 Bluntschli: Geschichte d. Neueren Staatswissenschaft, I. Kap. P. 5.—倘中世の社會學的考察については Gierke: Political Theories of the Middle Age. Dunning: Political Theories: Ancient and Mediaeval. Poole: Illustrations of the History of Mediaeval Thought. を參看すべし。

四六 Thomas Aquinus (1225—1274) "Homo animal sociale et politicus" といへり。

四七 Egidius Romanus Colonna (—1316): De regime principium. Augustinus Triomfus (1243—1328): Summa de Potestate papae.

四八 L. Stein: Soc. Fr. im L. d. Phil. P. 241 曰ふ、基督教はGottesstaat を以てストアの Weltstaat をおきかふ、神的國家は社會哲學的問題の爲によき趣味にはあらずと。

四九 Abu Bekr. Ibn Tofeil: Der Naturmensch, oder Geschichte des Hai Ibn Yokthan. Berlin 1782 (廿十二世紀の人) Ibn Khalden (1332—): Universalgeschichte.

實なり、實理的積極的主張を以てすれば、皆虚僞なりと。凡そアラビアの思想家は、一切の默示を排し、宗教の比較研究によりて眞理に達せむとす、是れ知識の側より中世の正統的教學に反抗せる者なり。二は實地問題の側よりする者にして、法王權教權の偏重に反抗する思想なり。此思想は、昔在羅馬の天下一統の主義を夢想する、中世佛獨伊各國の覇者の間に存し、而して學理を以て之を明劃にせしは卽ちマルシリウス[五〇]なり。氏はアリストテレエスに曉る所あり、社會に現世的及靈魂的の二面を劃して、以て政權教權の關係を明にし、謂へらく、法王全權は[五一]虚妄なり、基督は之を許さゞるのみならず、却りて之を禁遏す、立法は全然國家の權能に存す、法律は民人全般意志の發現にして、民人の輿衆[五二]は法律を制定し、之に權能を賦與するなりと。

[五〇] Marsilius de Padua: Defensor Pacis. 第十四世紀の初の人なり。

[五一] Plenitude Potestates.

[五二] Universitas Civium.

斯の如くにして中世の思想界は紛紛の間に了ふ。中世は實に政治問題ありて社會問題なきの時期なりき。[五三]希臘及羅馬に於いて一たび大に發達せる輿衆民人の思想は、ゲルマン粗野の民人、ゴオロワ未開の人衆に移植せらるるに堪へず、唯社會の優者のみ社會の意識を形成し、而して其觀念思想や、唯相互の間の權力關係、及君主と法王との權力關係、といふに過ぎざりしなり。斯かる社會には、社會學は成立するを得ず、其必要亦感知せられざるなり。

[五三] L. Stein: Soc. Fr. i. L. d. Phil. P. 257. 參照。

第七節　近世に於ける社會學的考察

近世の學問は、其端を文藝復興に發す。文藝復興を觀察する、須く縱橫經緯なるを要すべし。蓋し文藝復興は人心と文明との上に於ける複雜なる社會的運動の一簇に名づけたる者にして一千年來眠り來れる人心の覺醒[五四]なり、其効果乃ち近世文明を誘致せる者、等閑の觀を爲すべからず。夫れ復興は一種の反動なり、物其準を失ふこと甚だしければ必ず變ず、變じて而して其平に復せむとす、復する所は必ず曩に準を失へる所に在り。復興時代の思潮、亦實に此汎則の例外ならず、中世敎學の其準を失ふや、二個

五四　實は、近世文明國民は、當時まで未だに昔て、開眼を經さりしもの、眠來とは世界史の上よりいふ者、各國史の上よりいふには非ざるなり。

の方途に於いてせり、一に曰はく、希臘を學びて而して腐敗せる事、二に曰はく、宗敎の隈なき支配より思想の自由開展を制縛して、清新活潑なる見地に就かしめざりし事、是なり。則ち復興思潮が平準の回復を期する、亦豫期に難からず。果然復興の思想的運動は、亦二途より其端を發し來れり、甲は古學復興にして、乙は新學興起なり、是れ復興思潮の縱線的分劃なり。甲に於いては、從來の弊が主として希臘のプラトオン、アリストテレエス、二家の學習に在りしに應じて、此二家の新なる學習起り、乙に於いては、從來自然界、神、及國家に對する探究の甚だ不充全なりしに對して、新學興起は此三項の對象に向へり、是れ復興思潮の橫線的分劃なり。[五五]

五五　この思想界運動の重なる人物を擧ぐるときは左の如し。

(一)古學復興
(A)プラトオン派の再興
Plethon (1355—1452, Constantinople)
Bessarion (1395—1472)
Ficinus (1432—99) 々氏の門人。
Pico (1463—1494) フィ氏の友。
Reuchlin (1455—1522) 獨逸の Humanist.
(B)アリストテレス派の再興
Achillinus
Nyphus.
Pomponazzi. (1462—1525)
(C)ストア、エピクル、シセロ諸派の再興

(二)新學興起
(A)自然哲學及神學
Calidanus.
Telesius.
Patricius.
Thomas Campanella.
Giordano Bruno (—1600)
(以上以太利)
Agrippa.
Paracelsus.

而して此國家の體制及統制に關する新理論は、卽ち近世學問に於ける社會學說の起源にして、就中其特色を擧ぐれば、第一、教權の跋扈に反對して政權の支配を確認せる事、第二、自然哲學の原理より推論して、人間社會亦自然に一定なる理法の支配あるべしと爲し、之を自然法と稱し、以て法治思想の淵源となれる事、第三、交通の發達に促されて、國際關係も亦這般の法の支配あるべしと爲し、之に循由するを以て國交の要道と爲せる事、約して此三項に攝すべきなり。當時教法改革の精神、亦直接に這思想と表裏を相做し、相促し相輔け相進めたりしは明なり。ダンテ[五六]の教權の支配に反抗せる、マキアヴェリ[五七]の政治を以て事業と爲し、政法哲學の新原理を明めて、政治の理想は國民

Van Hermont (以上獨逸)
(B)政治學　本文示す所のごとし。

五六　Dante (1265—1321): De Monarchia.

五七　Machiavelli (1469—1527)
其政治的理想の綱領二あり(一)民衆的自由(Civil Freedom.)(二)國家の獨立張大及權力(一)は Discorso sopra la prima decade de Tito Livis (二)は Il Principe に見るべし。完竟共和國的自由は君主の權力に屈從すべしと後者は斷言す。

五八　Francesco Guicciardini (1483—): Del Reggimente die Firenze. Ricordi politici e civili. (1527—30).

五九　Thomas Morus: (London 1480-1538) De optime reipublicae statu deque nova insula Utopia.

六〇　Jean Bodin (Angers, 1530-96 (7)) Six Livres de la Republique.

六一　Albericus Gentilis (Ancona, 1551, Prof. of Oxford, —1611): De Legationibus libri tres. De Jure belli libri tres. De Justitia bellica.

六二　Hugo Grotius (Delft, 1583-1645 Rostock): De jure belli et pacis (Paris 1625) Mare librum seu de jure (和蘭の東印度に對する海商の自由を論じて海商法理を明にす)

の獨立及勢力を增大するに在り、これに協合する範圍內に於いて人民各個の自由を增進すべし、是れ直に一切道義の最高なり、教會は之を妨障する者、大に之と鬪はざるべからずと爲せる、ジッチアルヂニ[五八]の大體に於いて之に和せる、モオア[五九]のプラトオンを模擬して純然理想的に國家社會の性質を規定し、就中財產平均及信仰自由を極論せる、ボオダン[六〇]がマキアヴェリに反對して君主政治の味方となり、一切の宗教は政治上自由信仰を許さるべきを論じ、人、種學及史學上より自然法及政治學の理論を搆成せる、ゲンチリス[六一]が一般自然界及人性より法律上の權利を論じ、信教の自由及海商の自由を論ぜる、繼いでグロチウス[六二]が自然法理を明にし國際法の基礎を置き、個人の間に於

けるが如く國際法にも亦自然法及人定法[六三]を區別し、之を人法[六四]として神法に對し、人に理性あるを認めて以て社會的生活の基礎と爲し、國家社會は其仲間の者の契約より來り、刑罰權は社會生存の原理が必要とする範圍内に許さる可き者とせる、皆此期の錚錚たる者なり。之を復興時代、近世社會學的考察の第一期と爲す。

近世社會學說發達の第二期は、英國革命期に前後せる者卽ち是にして、英國に在りてはホッブス、ロック、ミルトン、大陸に在りては獨逸の政治學者の時代なり、是等の學者は、當時英國の時運に對し、國家社會の個人に對する權威を討究し、遂に主として國家社會の起因を研究の主題とす。大陸の政治學者は、同じく此問題を尋ねて、究竟國家を主宰する者は神か將た人かの間に迷ひ、遂に以て微弱なる啓蒙哲學[六五]時代の思想を誘ふに至り、而して近世史の劈頭に於けるが如き强盛活潑なる思想の調子は、漸く以て埋滅消散に赴けり。乃ちホッブス[六六]は謂へらく、人は其天性平和結合の動物に非ず、寧ろ相鬪相殺の性あれども、斯かる社會は甚だ不完全にして不安固なるが故に、一個絕對なる治者の權威に服從して其保護を受く、是れ國家社會の起源にして、其社會に於ける善不善は、此絕對權力が認定するの如何により分る、者、刑罰權は社會の自存の爲に存す、君主は神權により統治權を有すと。之に對してロック[六七]は曰はく、自然狀態に於いては人は平等にして、契約に由るまでは治者被治者の關係を生ずることなし、只夫れ

六三 Positives Recht.
六四 Göttliches Recht. 及び Menschliches Recht.
六五 Aufklärungsphilosophie; Phil. of Illumination.
六六 Thomas Hobbes (1580–1670): Leviathan.
六七 John Locke (1632–1704): Civil Government.

自然の束縛は免るべからず、人の幼稚なる、家庭の支配を受く、是れ以て王政の起源を說明すべき者、而もホッブスの所謂絕對統治權[六八]の如きは、決して之を許容すべからず、政府の權力は信任委託によりて生ぜるのみ、是故に主權は人民に存す、國家は個人の自由を害せず、平等の自由を擔保せむが爲に存すと。獨逸の政法學者プウフェンドルフ[六九]は、自然法を楯とし、社交性[七〇]は各個人の利害に基因すと論じ、トマジウス[七一]之を紹述し、アルベルチ及セッケンドルフ[七二]は、自然法は人の理性に準據すべしや將た耶蘇正敎義に準據すべしやを疑問とするに至り、就中乙は遂に眞の民權は天國に存して此世は唯荒漠たる假宅に過ぎずと爲し、人人皆基督に隨ひ、以て國家社會を完うすべしと說敎す。此間唯ライブニッツ[七四]、ヂルフ[七五]の樂天主義あり、ヂコ[七六]の人類は其身體の構造よりするも、精神組織よりするも、他人と結合せざれば眞の人類となり難きが故に、自然に社會は發生するの要ありと論結せるあり、以て第三期に移る。

之に次げるは卽ち啓蒙哲學時代の思想にして、近世社會學思想の第三期を成す。啓蒙哲學は近世哲學が次第に辯難討究を經て、方に懷疑の時期に進めるに際し、人心の倦怠に伴うて犀利なる合理主義及經驗主義の稍、其鋒刃を鈍うせるに際して、思想界の小康として現れたる者。之を大觀するに約三流あり、其英國に於ける者は、シャフテスベリイ[七七]、ハチソン[七八]等、古代希臘思潮の優雅なる人生觀に神

六八 Absolute Sovereignty.

六九 Samuel Pufendorf (1632–94): Elementorum Jurisprudentiae universaris Libri. II. De jure naturae et gentium.

七〇 Social nature. 其名目の敎濟ヒなるや Sociability とな。

七一 Christian Thomasius (1655–1728)

七二 Valentino Alberti: Compendium Juris naturae orthodoxae theologiae comfortatum 1678.

七三 Veit Ludwig von Seckendorf: Christlicher Staat.

七四 Gottfried Wilhelm Leibniz (1646–1716): Nova modus jurisprudentiae.

七五 Christian Wolff (1670–1754)

七六 Giovanni Battista Vico (1668–1744): De uno universae juris principio et fino uno.

七七 Anthony Cooper Schafteabury (1671–1713)

七八 Hutcheson (1694–1747)

源說[七九]を和せる者にして、主として倫理の講明に急なり。其獨逸に於ける者は、バウムガルテン[八〇]、レッシング[八一]を始とせる神源說一派にして、希臘殊にアリストテレエスの感化を受け、進化說を經とせる世界觀を有し、主として美學の講明に急なり。而して其佛國に於ける者は、革命に先だてる所謂百科全書派[八二]の唯物論者及凡神論者[八三]にして、主として自然界の講明に急なり。當時英國の學者は個人の研究に急にして社會の研究に專ならず、獨逸の學者は哲學的研究に專にして、カント、フィヒテ等を以てするも、政法及國家社會の學に於いては皆著明なる結果を來たすこと能はず、佛國の學者獨り漸く傾廢に赴ける大國の國勢に驅られて、頗る目を注ぎ意を用ゐる所あり、君主の權力、人民の

七九 Deism.

八〇 Alexander Gottlieb Baumgarten. (1714-62)

八一 Lessing (1729-81)

八二 L'Encyclopédiste.

八三 Etienne Bonnet de Condillac. (1715-80) Charles Bonnet à Swiss (1720-93) Denis Diderot. (1713-84) Jean d'Alembert (1717-83) Claude Adrian Helvetius (1715-71)

權利、其議論思辯の中心的對象となりて、此問題の講明は最も此國を推すに至れり。而して此期の特質亦自ら存す、即ち君權と民權との關係を主題とせる者。モンテスキウ[四]は政治上の自由思想の尊重すべきを論じ、國運の隆替は主として其消長に倚繫すと爲し、英國の實例に徵して憲法政治の重んずべきを論定し、三權分立及二局議院を以て、憲政に必要なる事項とす。氏の立脚地は、ボッシュエが今猶神的統制を以て社會現象を說明せむとせるに對抗して、全然人的自發的統制の根本義諦を立せるに存す。[八五]氏の政治論より一歩を進めたる者はルッソオ[八六]なり、氏は純粹なる民政主義を以て政治的理想と爲し、極端の自由主義を標榜し、而も積極的に如何にして社會を改良すべきかを立

八四 Charles de Secondat, Baron de la Brède et de Montesquieu (1689-1755): Esprit des lois (1748) Considérations sur les causes de la Grandeur des Romains et de leur décadence. (1734)

八五 Montesquieu: Considérations, Franceschi の序を參看すべし。

八六 Jean Jaeques Rousseau (Génève 1712-1778): Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes (1758). Du contrat social, ou principe de droit politique. 1762. Emile, ou sur l'éducation. 1762.

案する能はず、唯無垢の本然に復古すべしと主張せり。コンドルセ(八七 Condorcet. (1748–94))は亦既に共産社會を唱へたりき。

斯積聚の思想を取りて之を實地に現したる者は卽ち佛國革命の大事變なり、此事變を以て近世歐西社會の形勢は玆に一大進轉を成し、最近世界の局面乃ち開かる、而して社會學の史觀、亦玆に一轉歩を要す。

第三章　社會學の成形

第一節　社會學成形の因緣

佛國革命は、近世思想の發達に因して社會的政治的の一大事變と激成し、而して更に最近思想の大勢に向うて大なる影響促進を催すの因となれり。政治史に於けるが如く、思想史に於いて亦此大事變を以て史的區分の一大時期を劃するは、洵に當然と謂ふべし。今や此大事變の以後に於ける、社會學思想の變遷開展の大勢を觀察せむとす。

第十八世紀の末葉より第十九世紀に通じて、文明の開展及これが根基たる思想の開展は、一言にして之を要約すれば、始は一たび大に社會學的に進まむとし、中ごろ衰廢の傾向を呈し、終に迫ひて、遂に必然的重要を以て、著しく更に社會學的の趨向を趁ふに至れる者と謂ふべし。

佛國革命に前後して全歐の社會狀態及國勢に著明なる事象は、之を五項に約す、

第一、政治的問題。英國は第十七世紀に於ける二回の革命により て、既に國家統治上の問題を實地に解釋し了れるも、大陸に於いては卽ち未だし。當時全歐に豪華と權力とを稱へたる路易十四世の獨裁的覇圖の惡果は、乃ち復全歐に於ける斯病の弊毒をヱルサイユの朝廷乃其附近に集中し、癰疽の熟するが如く、洪水の決するが如く、人心の發達と社會の陳弊との衝突は、遂に佛國に於ける大破裂、大決潰となり、乃ち佛國の思想家血性漢をして新世紀思想の開山たるの名譽を荷はしめき。蓋し當時君民の關係未だ解釋に近つかず、君主及貴族僧侶の政權は、固より既に認められたるも、其下に在る所謂第三級なる普通人民の政權に對する要求は、漸く必要なる解釋問題となり來れり。此問題解釋の重要は、第十八世紀末の佛國社會に最も痛切に感ぜられき。獨逸に於いては少しく其趣を異にし、覇權と聯邦との關係は、ハプスブルグ家勢威の動搖と共に、寢く解釋を要する問題となり、ホオヘンツォルレルン家の興隆によりて僅に一般の解釋を了へたるも、其

均齊の安定なりや將た不安定なりやは、識者の容易に解答を與へざる所たり。而して此間獨り這般政治的問題成熟の氣運に向はざること遠きものを露西亞とす。

第二、經濟的問題。這般政治的問題に伴うて、社會的幸福の問題の、未だ一樣平等なる解釋を得ざるが爲に、有形の富の分配に關して根本的改革の必要漸く感ぜられ、而して經濟的社會問題は漸く起らむとす。

第三、國際的問題。近世の勞頭以來、多くの社會的事象の刺戟となりし本國と殖民地との關係は、次第に新に解釋を要する問題となり、其權力關係は、遂に米國の獨立を以て破壞的解釋を了し、而して平等的國家の相互關係、亦漸く問題となり來らむとす。

第四、學問的問題。學問の實質に於ける進歩は、歐西民族が初等なる宗教の羈絆を脫却してより漸次其運に向ひ來り、殊に第十七八世紀に於ける種種の發明によりて促進せられ、殆ど復舊觀を止めざるに至れり。然るも當時學問の方式は、依然として陳套に由り、而して其實質獨り駸駸として進歩せるもの、面目の一新は早晩起り來るを要し、而して學問的問題は、社會の最も高等なる意識圈の裏に起り來れり。

第五、文明的問題。學問上種種の發明は工業技術の發達を促し、人間交通の發達より、知識の發達及生活の發達を促し、人事は頻繁を加へ、是に於いて文明の發達は社會の局面を一變し、乃ち這般一切の發達に對して、進歩發達

其主なる者を擧ぐれば左の如し。
Pascal (1623-62) 物理學論理學
Newton (1642-1727) 重力則、數學
Leibnitz (1640-1716) 數學、哲學
Franklin (1706-90) 電氣學
Linnæus (1707-78) 植物分類學
Adam Smith (1723-99) 經濟學、哲學
Herder (1744-1803) 人類社會の研究
Priestley (1733-1804) 酸素
Galvani (1737-98) 電流
Herschel (1738-1822) 天王星
Lavoisier (1743-94) 化學命名法
Laplace (1749-1827) 星雲說
Göthe (1749-1832) 生物學、光學、文學
Cuvier (1769-1831) 動物學

其主なる者は左の如きなり。
James Watt (1736-1819) 蒸汽機關
Robert Fulton (1765-1819) 汽船

の全體に於ける整齊調和を要する、文明上社會理想上の問題は、漸く將に起らむとす。

凡そ斯の如き時勢の要求に應じ、最近世の人文に於いて大に社會學的考察の氣運を促したる因緣は、約して之を六項に攝すべし、第一は社會主義の興起なり、第二は自然科學の進歩なり發達なり、第三は哲學の進歩なり、第四は史學の發達なり、而して凡そ這般を促せる所以の根基は、卽ち世界當時の大勢にして、大勢は這般を促し、這般は思想の大體に影響し、思想は乃ち社會學說に於いて大本を寓し、其實際的活動として表現するや、還た更に大勢を促せる者なり。今此順序に隨うて各項の講明に進むべし。

三　チルムスはいふ、第十七世紀には高等數學及普通物理學の發達あり、第十八世紀には化學の發達あり、第十九世紀の中葉には生物學の發達あり、而して此第十九世紀の終に、剩る所は社會學の成形的組織あるのみと。(Organisme et Société, p. 5)。コムトの學問の體統なれば史觀に應用せる稍なるべけれど、未熟といふべし。

クロメヒトル (1736-92) William Ged ステレオタイプ (-1749) Jenner (1796) 種痘

第二節　社會主義の興起

社會主義と汎稱する所の者の興起は、實に最近人文の特象と稱すべし。抑此主義の名稱は、一八三五年英國に於けるロバルト・オオエン[四]の運動に際して始めて附せられたる者なるも、其精神は有史以來恒に存する所にして、正義、人道、神意、等の觀念、苟くも正正堂堂の主義として呼號せられたる者には、毎に包含せる所なるも、截然たる一の新主義として、社會及國際に向うて殆ど支配的理想として現れたそは、實に新世紀の特象といふを妨げず。社會主義の興起や、導火線は政治的問題に在り、經濟的問題及文明的問題を主因とし、而して國際的問題及學問的問題を

四　Robert Owen: A New View of society, or, Essays on the Formation of the Human Character, Preparatory to the Development of a Plan for gradually ameliorating the Condition of the Mankind. London, 1816. Sargant: Robert Owen and his Social Philosophy. 1860. オオエンの傳、學說、及事業を顯現して太佳。

副緣として乃ち成れる者。五

情誼を以て相結び、相互の利害を以て相繫げる、中古歐州封建社會の社會組織一たび破れて、近世的産業社會の漸く發達するや、所謂第四級卽ち勞動者の階級を生じ、自由競爭の趨勢は次第に産業兼幷の弊を誘致して、資本家は益〻富み、勞動者は愈〻貧しく、遂に所謂賤民となるに至る。富者の驕るや、其罪惡は直に貧者の嫉惡を促し、益〻兩者の瞹離反目を著しくす。之を目して已む可からざる自然の成行と爲して顧ざるは、所謂自由放任主義なり、奮然として起ちて其救濟に盡力せるは、卽ち社會主義の改革者流なりとす。

此救濟を旨とする改革者流にも、當時實は四種ありき、之を大別して二類とす。第一は極端的復古を主義とし、中古封建の社會狀態に復歸せむと期する者にして、更に稗史派及保守派の小別あり。第二は新なる社會的理想を建て、之に向うて進まむとする者、卽ち廣義の社會主義にして、更に一切の經濟的平等を中心觀念とせる共産主義、及分配的正義を旨とする狹義の社會主義に細分すべし。就中前なる者は次第に凋衰して、後なる者は漸く榮え、狹義の社會主義は次第に進みて廣義の社會主義と一致するに向ひ、遂に社會狀態の救濟其者とも一致せむとするに進めり。

社會主義の名稱は、從來頗る曖昧多義に用ゐられたるも、今其廣義なる者について大體の解義を下せば、凡そ政

五　ロッシェル亦同樣の見を持す。(Roscher: System der Oekonomik) 氏謂へらく、社會主義の興隆は左の五項に其原因を約すべし。
(一)貧富の對向。中等社會といふべき者滅びて、上級下級の間に懸隔を生ずるに至る。
(二)分業の高度に達せる事。是に於いて人と人との相倚賴すること益〻甚だしく、普通人の眼には人々の功績と報酬との關係を覺る能はざるに至る。
(三)革命による人心の振蕩の際、權利思想の混亂せる事。
(四)民政的憲法の結果として下級人民の口を藉るもの增加せる事。
(五)衆人間に於ける宗教道德の一般に低下せる事。

治上には民政主義を取り、倫理上には人情、仁愛、寛裕、及社會に對して私慾を離れたる勤勞の主義を取り、社會の階級中最も貧民の救濟を以て最要最急の事業とする者是なり、と謂ふを得べし。

這般の主義は、第十八世紀以前にも亦固より之有りしが、唯從前と最近とについて特質の異同を檢覈するに、從前の茫漠たる社會主義は、一に、耶蘇教徒間に於ける組合の如く、[六]或は小宗派に限られ、或は小組合に過ぎず、二に、希臘のプラトオン、英國のモオアの如く、空想的夢幻的に過ぎざりしが、最近世に於いて特に社會主義の目を受けたる者に在りては、一に、之を執り之を企つる人人に於ける自覺自重謹嚴の發達あり、二に、資本の重要に關して精細なる吟味考察を費し、三に、國際主義に傾きて國別の境界に局促せず、此問題の爲には萬國協同の手段に出でむとし、又實行を主とするに至れり。

第十九世紀を通して、此主義は一消一長、波線的進程を免れざりしも、之を約すれば左の如し。

第一、旨義上の變遷より察すれば、佛國の社會主義は獨斷的急劇的にして、獨逸の社會主義は研究的秩序的なり。甲の錚錚は、ベベウフ、[七]カベエ、[八]サン・シモン、[九]アンファンタン、バザアル、[一〇]フウリエエ、[一一]コンシデラン、[一二]ルイ・ブラン、[一三]プルウドン、[一四]ブランキ、[一五]クラバトキン、[一六]なり。乙の翹楚は、ロドベルトス、[一七]マルクス、ラッサル、[一八]エンゲルス、[一九]ワグネル、シモルレル、ブレンタノオ、ヘルド[二〇]なり。

六　猶太の Essenes 組合その例たり。

七　François Noël Babeuf (1764-97)

八　Etienne Cabet (1788-1856)　右二氏は共産主義を取れり

九　Comte Henri de Saint Simon (1760-1825) 著書甚だ多く社會主義の祖たり

一〇　Enfantin. Bazard.

一一　Charles Fourier (1772-1837)

一二　Victor Considérant. フウリエの門人

一三　Louis Blanc (1813-82) 國家社會主義の元祖

一四　Pierre—Joseph Proudhon (1809-65) 個人社會主義

一五　Auguste Blanqui (1805-81) 激烈的なる Blanquistes の首領

第二、方法上の變遷より觀れば、第一種を私人の實驗とす、オオエン、フウリエエの如き、是なり。第二種を國家法制の助成を以てする方法とす、ルイ・ブラン、ラッサル等これなり。第三種を國際的連通の方策とす、マルクスの如き、これなり。乃ち各其方法に應じ、第一種は個人的にして、倫理學及宗教と結合し、第二種は國家的にして、經濟及政法の學と結合し、第三種は超國家的にして、更に社會學と結合せむとす。

其他小派を以て目すべきは、佛のド・ラマンネイの創始に係り、英のキングスレイ、モオリス、ユウ等によりて成れる基督教社會主義あり、[二]教會を以て經濟社會及宗教社會の心靈と爲し、關鎖と爲し、以て密結せる調和せる團體に衆個人を組成し、基督教旨に準據して社會改革を企圖す。

露國に於ける社會主義の創始は一八七〇年に在り、專制的なる其國體に反對して竟に虛無主義の一派を形成す。米國に於ける社會主義及社會的運動、近年亦益〻盛なり。凡そ是等の諸國の社會的運動の連絡は、マルクスの發意に起れる萬國勞動者組合によりて統合の運に向ふ。

斯かる發生發達に係る社會主義は、其未だ充分發達せざるや、單に社會の渾一的研究を要求せるに於いて、其既に發達せるや、社會各樣の機關及其官能の相關、卽ち社會體制の吟味を要求するに於いて、兩面より社會學の興起を促せり。之を概言すれば、社會主義は、進みて國家社會主義となり、講座社會主義となり、其施措は社會政策となり、

一六　Pierre Kropotkin 露人、無政府派の領袖
一七　Rodbertus Jagetzow (1805-1875)
一八　Karl Marx (1818-1883)　Ferdinand Lassalle (1825-1980) 二氏共に社會民政黨の元祖たり。
一九　Friedrich Engels. (1820-1895)
二〇　Adolf Wagner, Gustav Schmoller, Lujo Brentano, Adolf Held 四氏は講座社會主義の錚々。
二一　De Lamennais, Charles Kingsley, Frederick Maurice, Thomas Hugh.

其根基は講座に於ける經濟學となり、其根本的渾一的研究は乃ち之を社會學に求むるに至れる者なり。

社會主義史中の偉人は、同時に亦社會學史中の偉人[三]たるが多きも、社會主義の歷史は殆ど完全に研究されあるが故に、今槪說を要せず。[三]

第三節　自然科學の進歩

上　エネルギイの理論

輓近自然科學の進歩を約すれば、大綱は二と爲る、一はエネルギイの理論にして、二は進化の理論なり。エネルギイの理論は輓近物理學の根本原理を供し、化學其他一切の自然科學の理論に向うて根本的革新を促せる新發明なり。之に關係せる偉人は、英のジョウル、グロオヴ、獨のマイエル、之を擴充せる偉人は、トムソン、ヘルムホルツ、テイト、マックスエルなり。[二四]此理論の影響を觀察するに、之を八項に約す。

第一、光、熱、音、電氣、磁氣、一切の物理的現象は、從來皆殊別なる現象と看做されしが、今は皆分子の振動に外ならず、唯其振動の模樣を異にするよりして各種の現象を生ずる者なりといふこと明になり、是に於いて物界各種の現象の推遷變態、亦容易に理會せらるるに至れり、是れ卽ちエネルギイ[三]態の理論なり。

Mulon: Histoire du Socialisme. 3 vols. 氏は佛國勞働者の社會主義の首領なり。其他此主義に關する著書目錄のみにして浩瀚の書

Joseph Stammhammer: Bibliographie des Socialismus und Communismus. Jena, 1893. の大册あり、尙別に同氏の社會改革の書籍目錄の大册存す。

[二四] Joule, Grove, Sir W. Meyer, Thomson, Helmholz, Tait, Maxwell. 尙 Tyndall: Heat considered as a Mode of Motion. Balfour Stewart: Conservation of Energy. Thomson and Tait: Natural Philosophy. Tait: Recent Advance in Physical Science. Sir W. Thomson: Popular Lectures and Addresses. Helmholz: Popular Lectures. Scientific 等の諸書を參看すべし。

[三] 就中サンシモンのコムトの師たるに於ける、マルクスの歷史的唯物論に於ける、尤も影響の大なるものとすべし。

[三] 其主なる著書の一斑を擧ぐれば次の如し

Richard Ely: French and German Socialism in Modern Times. 1888.

William Graham: Socialism, New and Old. 1890.

Thomas Kirkup: Inquiry into Socialism. 1888.

——: A History of Socialism. 1892.

Friedrich Engels: Die Entstehung des Socialismus von der Utopia zur Wissenschaft. 4 Anl. 1891.

Warschauer: Geschichte des Socialismus u. Kommunismus. 1892.

Bernstein, Hugo, Kautsky, Lapurrue, Mehring, Plechanow: Die Geschichte der Socialismus in Einzeldarstellungen. 3 Bde. 1895.

第二。エネルギイは如是變態するも、其變態の際、曾て一毫の損益なきこと更に明確となれり、是れ一は近世の學界實驗の方法の大に進歩せると、二には數學の大なる進歩により て計算の精密を加へたるとに由る、是れ卽ちエネルギイ不滅の理論なり。[三五]

第三。エネルギイは如是不滅なるも、適用すべきエネルギイは、宇宙間に次第に減損す、之を名づけてエネルギイの變衰といふ。宇宙エネルギイは次第に變衰して、宇宙の各部は漸く平等及安定均齊の狀態に近づき、其極限は卽ち絶對死靜の有樣となるべし、蓋しエネルギイの適用は其潛量に倚繫す、エネルギイ不滅なりとも、宇宙の一點が他點に比してエネルギイの差卽ち潛量を有することな

[三五] ヨウルが水の一瓦を上昇する熱の仕事を四二八六四瓦と驗定せる例、水力に電氣を通じて分析するは原子引力に打勝ちたる結果なる例、日光光彩は化學作用なるの例、皆これを說明す。

くば、運動あるを得じ。一切の現象は運動なり、運動の結果は仕事なり、仕事を爲すの能はエネルギイなり、故にエネルギイの變衰は宇宙現象の絶對死靜に終る、是れ卽ちエネルギイ變衰の理論なり。

第四。エネルギイの理論既に立ちて、然る後自然科學者の世界觀を尋ぬるに、尙物質といふ觀念の存留あり、但し論理的には物質の觀念はエネルギイの觀念に包括せらるゝも、エネルギイの作用は、物質なしには思惟せらるゝ能はず、而も宇宙悉く物質の充滿なることは、實驗上之を認むること能はず、是に於いて所謂エエテルの說あり、而もエエテルの說や甚だ窮す、乃ち復渦環の說あり、而して晩近の物理學は此點に於いて趨趄す、之を物理學者の觀

界と爲す。

第五。物理學界の諸現象に止まらず、化學に屬する諸現象、亦皆エネルギイの理論の外に出でざること、既にして亦明なり。化合は外系に向うてエネルギイの放散するに成り、分析は外系よりエネルギイを吸收する事、卽ち仕事に外ならず、而して近時の研究は、更に其數量上の關係をも明了にし、原子分子の研究大に進み、以て輓近化學理論の中心となれり。[二六]

第六。此駸駸たる趨勢は、更に進みて生理學に及ばむとす。從來生活現象は一種特異なる現象を以て目せられ、生體内の現象は生體の外界を規定する物理學及化學とは純然相異なる現象の一系なりと信ぜられしが、輓近學問の進むに隨ひ、生體解剖先づ盛に行はれ、乃ち生理學の大進歩となり、乃ち病理學となり、醫化學となり、生體現象に於いて、複因は極めて多大なるも、別に一種不可思議なる生活力などいふ者の作用あるにあらず、生體を構成する物質も亦外系物界の物質と相異あるにあらず、究竟同一物質に同一エネルギイの作用するによれる現象に外ならざること漸く明確となり、かくてエネルギイの理論は、遂に生理學界にまで進入せり。

[二六] Lothar Meyer 及 Mendeleieff は有名なる週期の理法を發明す。

第七。心理學は從來神秘的なる學問と信ぜられ、縱に智情意の三分法によりて一切の心的現象を說明し來りしが、輓近多元統一論、若くは一元二面論に基を置ける心理の理論が勢力を得るに及びて、心身の相關は更に一層の

近密を認められ、是に於いて觀念の刺戟的性質の考說の如きは、一にエネルギイの理論と相關するに至り、以て漸く心理學界に於ける此理論の領域の擴張を來さむとするの勢を呈せり。

第八。エネルギイの理論の自然科學に及ぼせる影響及其性質、粗、此の如し、抑、エネルギイは不滅なるも、其宇宙現象を成すは變態により、變態は刻刻變衰を促し、而して其終局は宇宙の絶對死靜に至る、此の如く、エネルギイの論は直に星學の問題に移る。星學の研究は、輓近光彩分析の發明[二七]により、殊に其天體物理學の部分を發達し、數學の進步及觀測器械の進步により、理論星學及球面星學の部分を發達し、而して精細なる自然科學の方法によれる宇宙論を供給するの道を開き、以て健全確實なる世界觀の根基を與ふるに至れり。此根基の上に立ちて此世界觀の構成に達せしめむとするは、卽ち進化論の事功なり。

Fraunhofer, Kirch-hof, 二七

第四節　自然科學の進步

下　進化の理論

進化の理論は、古希臘の哲學に於いて既に之を看し所、[二八]中世の學術に於いても、宇宙の事物開展の理法を尋ぬる者、縷縷として絶えず、近世又哲學者思想家の之を繼承して此方面に理想を寄する者相次ぎしも、[二九]從來の立論は、或は哲學の第一原理より、或は宗教の教條及獨斷より、演繹し來る所にして、其自個に於いて獨立の價値を有する者

Anaximandros, Anaximenes, Xenophanes, Heracleitos, Empedocles, Demokritos, Anaxagoras, Aristoteles, Epikurus, Gregorian, Augustinus, Bruno, Abubaker. 二八

近世の哲學者及自然哲學者　Bacon, Descartes, Leibnitz, Kant, Hume, Herder, Lessing, Schelling. 二九

に乏しかりき。第十八世紀の交より歸納的思辨に訴へむとする者漸く生し、自然科學の進歩に伴うて、獨立の價値と重要とを有する進化論、卽ち輓近の意義に於ける進化論は漸く生し來れり、[一〇]而して之を大成せる者をダルヰン[一一]及ヮレエス[一二]と爲す。今此一系の潮流を成せる進化論を經として、方今自然科學界の世界觀の構成を攬要すれば、約して六項と爲す。

第一。天體の創始由來に關する理論は、佛國のラプラアス、及獨逸のカントが提唱せる星霧說により、始めて價値ある提說を得たり。佛のラグランジ亦之を助け、ハルシェルは一七八一年に天王星を發見し、ガルレは一八四六年にルヱリエの數理的計算の結果として海王星の發見を爲し、乃ち球面星學に於ける偉大なる發達を遂げ、而して當年の星霧說は益〻改良せられ進歩を成して以て今日最も正確なる宇宙論の根基を供するに至れり。[一三]星霧說は、卽ち確實に知られたる尋常物理界の理法を以て天體の創始由來を完全に說明する者なり。

第二。次に、物理的及力學的地質學に端を發して、天體の說明に至り、以て重力則を完全にし、天體進化論を構成せるを、ラグランジに創まれる潮汐進化論[一四]と爲す。蓋し潮汐進化論は、天體進化と地質進化との連鎖となりて、兩般の進化が唯一系の連續に過ぎざるを明にせる者なり。

第三。地質學は星學と異にして、甚だ新しき學問なり。第十六世紀に獨逸のアグリコラの研究あり、第十七世紀に

一〇 Linnæus, Buffon, Erasmus Darwin, Lamarcke, Goethe, Treviranus, Geoffroy St-Hilaire, St-Vincent, Isidore St-Hilaire.

一一 Charles Darwin (1809-82): On the Origin of Species by Means of Natural Selection. 1859. The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex. 1871.

一二 Alfred Russel Wallace. (1822-) 以上三氏は同時に發明の功あれど成果の大小ないへば固より〻氏を推すべし。

一三 Laplace, Kant, Lagrange, Herschel, Galle, Leverier.

一四 Thomson and Tait: Natural Philosophy. vol. II. 附錄 Tidal Evolution に充分なる數理的說明なり。

は丁抹のステノありて、斯學の鼻祖となれり。降りて第十八世紀の末に至り、獨逸フライブルグの教授エルネルトありて斯學に長足の進歩を與ふ。佛國にはド・ボオモり、其門下にブウホ。ありて斯學を整成し、次いでア・フムボンあり、近時英國にはライエル出で、ナ・ダルイン亦化石學古生物學上より斯學の進歩を促し、以て地質學、就中歴史的地質學を進捗し、天體進化を紹ぎて生物進化の端を發くに充分なる架橋を構成せり。是に於いて地質の生成及變遷の大現象も、亦全く手近なる物理的力學的理法を以て完全に說明せられ得る者となれり。[三五]

第四、進化の理法は、更に進みて、無機界より有機界に、無生物界より生物界に迫らむとす、而して其連鎖となるべき事項は、卽ち有機物起原の問題なり、無機物有機物及具機物、各種發生上の關係なり。從來無生物と生物、及之を成す物質として無機物と有機物とは、全く相異なる者と見做され、有機物より組成する生物は、一種特別なる生活力と稱する者を有すと信ぜられ、無機化學と有機化學とは嚴密なる區別ある者とせられ、動植物質は生活力を享有するに非ざれば得可からずと思惟せられき。則ち進化論を把持する者も、亦唯無機物より直に有機物に遷移すといふ說を取りて、古代希臘の學者より、近時エ・ダルヰン、ラマルク等に至るまで、皆之を以て有機物の起原の說明とせり、爾後ザデロオ、ボンネの先存萌芽說を經て、以て近時の生物學に於ける原形質說に至り、一切の有機物は乃ち

玆に其始原の明確なる說明を得たり。而して更に原形質と無機物との由來上及性質上の關係を明めたるは、星學及化學の進歩なり。星學上の現象として、天體進化の過程に於ける一時期の表象と稱すべき隕石が、時として水化炭素を有する事實の發見あり、又彗星の頭部の光は、時として光彩の上に炭素と水素とを含有する瓦斯あるを示す事實の發見あり、化學上の進歩によりて、ヲエレルが尿素の合成を成せるより、ベルトレエが蟻酸の合成を成せるあり、爾後年年有機物の人工製造法は發明せられ、遂に今日一切の有機物は人工にて得べしとの希望を生ずるに至り、是に於いて、有機物と雖も格別無機物以外に生活力といふ不可思議力の附加あるを要せず、無機物と有機物とは毫も根本的の區別あるに非ざること、全く明確となれり。有機物たる原形質はシトオドを成し、其少しく進むや核を生ず、核あるシトオドは卽ち細胞にして、細胞は卽ち具機物なり、是れ卽ち生物構造の單位なるが故に、有機物と具機物との間、亦根本的に截然たる區別なきこと明確となり、是に於いて無機物有機物及具機物の三類は、宇宙進化の過程に於いて一も截然たる區劃を有する者に非ざることを明むるを得たるなり。

第五。これに次ぐ者は卽ち生物進化の原理なり。具機物は卽ち生物なり、生物の進化を說明せる者は、ダルキン及ワレエスなり。ダルキンの種源論の未だ世に出でざる、種は不變不易の物と信ぜられ、一切の生物は、皆各其祖あり

て、這般の祖は、皆各別に創造せられたりと信ぜられ、所謂特殊創造說は一般の人の信ずる所なりしが、二氏出でて生物進化の說を唱へ、種は不變不易に非ず、或る極めて簡單なる生物より進化して、漸く多數と多種とを生じ、遂に以て今日吾人の看るが如き生物世界を致せるなりと說き、爾來更に學者の研究によりて、此理法は愈堅確なる基礎を得るに進む。此理法を要約すれば、變化及遺傳の二大原理に歸す。變化とは、生物の生存競爭に際して、其生存を全うせむが爲、外界に應じて其體に發生する種種の變動をいふ。遺傳とは、性質體質が親より子に傳はり行くことの說明にして、其事實的證認は夙に確立せるも、其方法の物質的根據については、近時進化說議論の焦點たり。[三六]要するに生物界は、此二大原理の規定に率うて、單一種より其開展進化を成し、以て今日の生物世界を成すに至れることと、全く明了せるなり。

第六。生物進化の理法は當然人をも包括す、而して直に社會の進化を論ずるに至れるはスペンサルなり。氏は上來數段の發見によれる宇宙進化の理法をば、直に社會に應用して、以て其社會進化の理法を立てむとせり。之に先だちて氏は其心理學原理の研究に於いて、一般生物に比して人の特殊的性質の研究に觸れたるも、究めて未だ充分なる能はず、乃ち氏の功や進化の理法を社會に應せるの機敏に存して、如何なる網目形相を以てすべきかの造詣は、更に後の學者を竢てる者なりとす。

三六　これについて主要なるは、Pangenesis (Darwin) Perigenesis (Haeckel.) Idioplasm (Nägeli) Keimplasma (Weismann) Intercellulare Pangenesis. (Vries.) の諸說なり。Haeckel: Natürl. Schöpfungsgeschichte, I. (S. 200–6)

輓近自然科學の進歩を約むれば、略、斯二綱に悉く、卽ち第十九世紀の學問的問題は、直にエネルギイの理論を促し、エネルギイの理論は、宇宙の研究に進みて、進化の理論と握手し、進化の理論[三七]は漸く進みて終に人及社會の研究を促進し、宇宙を連續的渾一的の體と看做さしめ、暗に以て合一論的世界觀の根據を供するに至れる者なり。

三七　進化論の歷史の參考書は Osborne: From Greeks to Darwin など可なり。

第五節　哲學の進歩

歐西最近世の哲學思想は、ヒュウム及カントによりて開かれたる舞臺の繼承なりと謂ふべし。蓋し近世哲學は、人心の覺醒と共に其新生面を開きて、大陸を根據とする合理的思潮、英國に旗幟を揚げたる實驗的思潮、兩兩其精英を競うて、一たびは大に氣勢の盛なる者ありしも、其末稍衰微して、所謂啓蒙哲學なる者乃ち起る。是時に當りて、哲學的討究の精神はヒュウムの懷疑哲學に寓し、カントの批評哲學に於いて乃ち大に發す。カントの哲學は、其組織の大と研究の精とを以て、尙哲學本來の意義に圓滿ならざる所あり、而も爾來一世紀の間、勢力ある哲學思想は多くこれより流出せる末流に外ならずして、歐西哲學の中心は乃ち移りて獨逸に在るに至れるなり。

カントの根本問題は理性なり、其純粹となり、實踐となり、人心となり、自然界となり、諸の方面に現るゝや、カントは以て合一と爲し單一理性の表現とするの設想を有せしは明なるも、未だ明白に之を證明せしことあらず、乃ち

之を以て問題と爲し、哲學の根本樹立と爲すは、其事後繼の哲學者に在りとす、其一系は卽ち近時の合一哲學の哲學者に外ならざるなり。

乃ちカント以後の新問題は、約して三項と爲すべし、一に單一原理より衆多の機能の理論的導出、二に全理性界の一元論的說明、卽ち純粹理性及實踐理性を一元に歸結する事、及三に世界の物的因子及觀念的因子の二元を一元に歸結する事、卽ち自然界と自由との調和、是なり。此等の問題を一括すれば、宇宙萬般の事物を一元的原理より說明して、以て普通圓滿なる一元論を創立する事、卽ち是なりとす。

此等の問題の第一、卽ち理論的問題を解して、以てカントの哲學を補へりとせる者はラインホルドなり。氏はカントの哲學を以て根基を缺くと爲し、知識の根源の說明を缺くと爲し、之を說明して乃ち知覺的表象なりと爲し、乃ち之を組織して其始原哲學を成せり。[三八]

Reinhold: Elementarphilosophie.

問題の第二に答解を與へて、純粹理性と實踐理性との合一を效果せる者を、フィヒテの主觀的觀念論と爲す。其大綱にいふ、實在する者は自我のみ、外物自我を限制すと見做さるゝも、其實自我の自個限制なるのみと。所謂自我は自個幷に非我を措定すと爲し、創造的自我を以て絕對自我なりと爲すは、此論結に至るの過程なり。

第三の問題、卽ち自然界と自由との關係は、實に輓近思潮の中心點にして、其社會人生の實地に關係すること極

めて深く、卽ち自由放任主義と國家主義干渉主義自然法說と歷史說等、諸〻重要なる問題の關鍵となれり。これが答解は、哲學上獨逸四家の觀念論と須ちたりき。

乃ちシェリングは以爲へらく、自然界を以て直に非我とせるフィヒテの教學は、自然界に關する一切の解說を哲學體系以外に排斥するに似たり、知識を導出せしと同一なる本源より自然界を導出せむと欲せば、心靈と自然界との合一より出發せざる可からず、此合一原理を呼びて絕對といふと、卽ち氏の哲學は、此絕對を根本原理とせる物理的觀念論なり。

ヘエゲルの答解にいふ、凡そ想念と存在とは合一なり、故に萬有の根本原理は必ずしも物的なるを要せず、唯純粹なる觀念にして足れり、其別名を絕對智能、純粹觀念、精神觀念等といふ。萬有の根本原理既に這般の想念的原理なるを以て、氏の形而上學は、單に思惟作用及觀念の體の吟味に止まり、卽ち論理學と一致す、氏の哲學は論理的觀念論なり。

ショオペンハウエルの答解にいふ、想念は存在と異なり、智能は第二的の者にして、萬有の根本原理は單に欲に過ぎず、吾人は自個を內省して、吾人といふ者亦畢竟欲に外ならざるを知り、此より類推して萬有の本體亦實に然るを知る。欲の最大光明を以て顯現する者卽ち智能にして、是れ卽ち智識の原理たり。欲は智識の光によりて照され、乃ち自個が生活界諸般の煩惱の原因なるを悟る、此覺悟

は卽ち欲の終局にして、卽ち世界の終局なりと。氏の世界觀は力學的觀念論とも稱すべし。

終にハルトマンの答解にいふ、ヘエゲルのも、ショオペンハウエルのも、各一理ありて而も未だ完全ならずと。乃ち甲の凡理說と乙の凡欲說とを合成して、觀念と意欲とを兩屬性とせる、無意識と謂ふ所の者を萬有の根本原理と爲し、世界を以て所謂無意識の表現となせり。乃ち氏は一個の復性的觀念論を成せるものとす。

近時の哲學思想は、斯の如く繼承的に合一哲學の思想を絶たざるが、此間勢力ある思想家に於いて唯一の除外とすべきは、ヘルバルトの多元論なり。謂へらく、世界は、撞着なき、單純なる、相互に性質に於いて多少の差ある、衆多の實在より成立す、主觀意識界の元子は卽ち表象にして、客觀界の元子は卽ち單子なりと。此多元論は、大に心理の說明に影響を有せるも、合一論の如く宇宙の根本問題に觸着するものにあらず。

此の如くにして輓近の哲學思想は、頗る健全なる進步の方向を取り、大なる世界觀の上に健全なる人生觀を建てむとするの傾向漸く顯著なるに至れり。近時ヴントの如き、最も一般學問の發達に對して調和的考慮を有し、ニイチェは更に哲學の方法上最後の舊壘を破壞し了せむと期す。佛英兩國、亦各其哲學者を有するも、其主なる者は寧ろ直に社會學に於ける貢獻者を以て目するを可とす。

第六節　史學の進歩

哲學が健全なる世界觀を立して以て自然界と自由との問題を研究せるに平行して、史學亦這問題の生面を開けり。初め歴史は單に事實の記述を旨とし、人間の經驗を蒐集せる博物館たるに過ぎざりしが、漸く因果の理法の貫通あるを發見するに及びて、直に以て一貫の原則と爲し、茲にギゾオ、バックル[三九]に至り、因果法を以て歴史脈絡の貫通を踪跡せむとする所謂文明史なる者を生せり、其所謂因果法とは物理的因果法なり、而して極力之に反對して人間個個の自由を說かむとせる者はカアライルなり[四〇]。文明史の興起は是れ晩近史學の一進歩なり。

三九　Guizot: Histoire de la civilisation. Buckle: History of Civilisation in England.

四〇　Thomas Carlyle: History of French Revolution. ——: Past and Present. ——: Heroes and Hero-worship. Carlyle の著書は種種人口に膾炙せるがこれを顯現評論せるは John M. Robertson: Modern Humanists を看よ。

斯問題に對する運動、獨逸にては二面に向へり、卽ち右の理法の探究を旨とする者は、歴史哲學を作し、人間文明の開展の中心事實の攻究を旨とする者は文明史に向ふ。

一八二八年、シュレエゲル[四一]始めて歴史哲學を說き、越えて十年、ヘエゲル[四二]亦其哲學體系の一部として歴史哲學を說述す、是れ所謂文明史が前定原理として措定する原理を攻究するを以て自任する者、其造詣の如何は暫く措き、晩近史學の進歩は之を以て其二に數ふべし。近時ザュクウドレイ、リッペルト、シムコックス等[四三]の大著に至りて、文明史の意義は殆ど定まり、明に歴史哲學に對するの地位を取るに至れり。但し獨逸の人文史家の間、尚未だ此題目について議論の紛雜なきにあらず[四四]。

四一　Schlegel: Geschichtsphilosophie. 1828.

四二　Hegel: Geschichtsphilosophie. 1838.

四三　Ducoudray: Histoire de la civilisation ancienne, etc. Lippert: Kulturgeschichte, Simcox: Primitive Civilisation vols. Honegger: Allgemeine Kulturgeschichte. Henne am Rhyn (Otto): Die Kultur der Vergangenheit, Gegenwart, und Zukunft, in verschiedener Darstellung. 2 Bde. 1890.

四四　Gothein: Die Aufgaben der Kulturgeschichte 及 Gumplowicz: Sociologie u. Politik. I. Buch. を參看す。又歴史哲學については Paul Barth: Die Probleme der Geschichtsphil. 1892.

Robert Flint, History of the Phil. of History.
Ch. Rappoport: Zur Charakteristik der Methode u. Hauptrichtungen Phil. der Geschichte. 1896.
F. Tönnies: Neuere Phil. der Geschichte: Hegel, Marx, Comte. 1894.

史學第三の進歩は、研究法に於ける者是なり。資料の蒐集、資料の吟味、編述の體貌、皆是に於いて進歩を成せり、而して史學に於ける精確の程度は上進す。但し是れ甚だ他の學科に關係せざる事項にして、全く史學分内の進歩なり。

史學第四の進歩は、包含的組織的なる世界史の研究に於ける歩程にして、ランケを以て近時の雄とす、こは最も教育的價値に富める進歩なり。

史學の斯の如き進歩は、一面に於いて更に諸般の學科、殊に社會に關する諸學科に影響し、其研究法に立入りて、所謂歴史的研究の大潮流を成せり。乃ち法學に於ける歴史派、經濟學に於ける歴史派は、其最も著き者、其他一般に物的以外の學科にして、這般の影響を蒙らざる者殆ど稀なり。其特色は毎に架空の議論を、避けむとし、純ら歴史上の事實に基づきて立論し、時として知らず識らずあらむとする者とあらしむべき者とを混同するの弊あり、空論を去りて實理的研究に就くの過程として大功ある思潮といふべし。

歴史の學の進歩は、斯くして直接に間接に社會の學を促せり。

第七節　經濟學の進歩

經濟學[四五]は其初め政治學の一部と見做され、所謂官府學の名稱の下に總括せられしが、第十八世紀に於いて、英國

四五　經濟學の歴史は完全に研究せらる、こいにはこれを詳述するを期せず。
Ingram: A Philosophical History of Pol. Economy.
Cossa: An Introduction to the Study of Pol. Economy. 其他諸書あり、皆可なり、就いて看るべし。

のアダムスミス、其著國富論を出してより、始めて重要なる一科獨立の地位を占むるに至れり。佛國に於いても、ケネエ及チュルゴオの如き、革命に先だてる經濟家あり、是れ皆以て當初の經濟學の代表とすべし。當初の經濟學は、富を尊重するの傾向強く、殊に富の生産に重を置き、就中尤も農耕を重んじ、轉運を以て生産と見做さゞりき、之を重農學派と爲す。アダムスミス[四六]出づるに及びて、始めて富の眞義を解釋し、富の生産分配及交易、悉く經濟學の對象問題として入り來り、富の學問としての經濟學は茲に成立せり。此學派は、かくて商工の利害に密接し、所謂マンチェスタル人の稱呼は之に附せらる、是は專ら此派の人に關し、國民偏癖を基とせる淺薄單純なる個人的功利的見地を

罵る者にして、以て學問上の價値を上下するに足らず、而も其研究法の演繹的に偏せるは、寧ろ明なる缺點と稱すべきなり。爾來佛にセイ[四七]あり、亦殆どアダムスミスを祖述す。

其後英國のリカルド[四八]、マルサス[四九]の出づるに及びて、分配論は漸く重要を增加し來る、リカルドに借地料の論あり、マルサスに人口論あり、而して斯く分配論の重要の進めるは、卽ち經濟學が富の演繹的議論たるより漸く社會的講明に進まむとする徴候たり。

第十九世紀の前葉より歷史派の研究漸く起り、ロッシェル[五〇]に至りて大成す。其大旨は、經濟現象について某政策の當否を判する、萬古不易の準繩あるべきにあらず、必ず變遷

[四六] Adam Smith: Wealth of Nations.

[四七] Jean-Baptiste Say: Traité de l'écon. pol. 1803.

[四八] David Ricardo: Principles of Pol. Econ. and Taxation.

[四九] Thomas Robert Malthus: An Essay on the Principles of Population, as it affects the future improvement of Society, with remarks on the speculation of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers.

[五〇] Wilhelm Roscher: Vorlesungen über die Staatswirthschaft nach geschichtlichen Methode. 1843.

する時代に隨うて之が判斷を下さゞる可からず、されば吾人は唯現時の經濟現象の研究を以て滿足す可からずして、必ず古代各國民及現時諸國民の間に比較研究を成さゞる可からずといふに在り。ヒルデブランド、[五二]クニイス[五三]等之に繼ぐ。抑〻經濟學の歷史的研究は、明に法學に於ける歷史的研究の影響を受けて乃ち經濟學に於ける短處を補充せる者なるも、こは實は唯方法上の一大改善たるに止まりて、未だ充分に斯學對象上の改革たる能はず、勿論歷史派の經濟學、亦對象上の改革をも含めども、之を掲げて充分に明なるは、後の講座社會主義の經濟學を待たざるべからざりき。但し一人の學者にして能く此兩派に兼屬するを得るは、二派が相反對せずして唯其範疇を相異

[五一] Bruno Hildebrand: Die Nationalökon. der Gegenwart u. Zukunft. 1849.

[五二] Karl Knies: Die Pol. ökon. vom Standpunkte der Geschichtlichen Methode. 1853.

にするが爲なり。

經濟學最近の發達は、社會主義の精神の開展と密に相關係す、而して乃ち斯學の對象は漸く進みて、國家社會成立の要素として經濟的關係に於ける人の研究たるに至れり。此性質より、近時ワグネルの如きは、其經濟原理の第三版に於いて、著く心理的研究を加ふるに至れるなり。是に於いて、研究の方式も、單にあらむとする者の研究に止まらず、進みてあらしむべき者の研究に至り、[五三]而して經濟學は漸次其學當初の先覺が希待せる所に接近するに至れり。

[五三] Wagner: System der Pol. Oekonomie. Schmoller, Brentano Held 以下獨逸近時の大家、研究體相の小異を以て殆ど皆これに屬す。

蓋し經濟學近時の始祖アダムスミスは、亦實に當時英國の大思想家にして、經濟現象は他の一切の社會現象と

全然分別して論究し得べき者にあらずと思惟せり、是故に氏の大著亦所謂純粹經濟的事項以外の事象を論ず、是れ氏が所謂科學的經濟學者より駁雜不純なりとの批難を蒙れる所以なり、而も是れ實に氏が夙に社會の渾一的研究に着目せるの表示にして、最も重んずべき所たり、[五四]其後更に進みてコムトに至りては、その教學の精神より容易に期待せらるべきが如く、最も經濟現象の分別的研究の失敗に了ふべきを極論す、今者獨逸の經濟學、ワグネルの心理的研究あるに至りて最も斯學の此性質を事實に立證す、かくて經濟學は、其變遷發達の一世紀を以て、究竟其根本的研究を社會學に仰がざる可からざる所以を證明す。[五五]

[五四] 經濟學史家イングラム亦尤も吾と同感にて犀利なる筆法もてこれを論ず。(Phil. Hist. of Pol. Econ. p. 90)

[五五] ド・ロベルチイは、社會に關する研究が尤も分割的研究に不適合なる所以を詳論す。(De Roberty: La sociologie Chap. III.) 殊に

第八節　政法の學の發達

政法の學は、一般に人事に關する學問と同じく、古代に在りては、唯渾一的研究の下に人事の學問として教說を存せしのみ、而も這渾一的研究は、[五六]學問分別の事起る以前に屬するが故に、其資料、其知識、固より未だ充分なる能はず、近世這般學問分別の事大に起るに及びて、政法の學亦特立の端を發く、是れ實に第十七世紀の交、其鼻祖はマキアヴェリに在りと謂ふべく、英のホッブス、ロック、之に與る、就中法律學の發達は少しく政治學に後れ、其初は哲學的思辯の時代とて、先づゲンチリス、グロチウス等の自然法說の流行を看、第十八世紀の末、モンテスキウ[五七]に至りて、此派の

[五六] 第二篇第一章第三節を看よ。

[五七] Montesquieu: Esprit de lois.

法學思想は稍〻渾融の域に達す、而して氏は實に新學派の興起を豫言する過渡の地位を占めたりき。

爾時自然科學の研究の造詣は漸く人目を聳動するに足る者あり、教法改革の時代、近世哲學の曉鐘初めて響を傳へてより、既に二百霜、哲學者は綿綿として絶えざるも、其所說は頗る陳套を補綴するに過ぎざるやの憾ありて、其が與ふる所を基礎とする、實に學問上の効力に疑なき能はず、且當時歐洲各國法制の發達、亦既に舊時の觀を成す可きにあらず。凡そ這般の因緣によりて、自然法の研究と成法の研究との截然として區別すべきを論じ、成法の研究は宜く歷史的方法に賴るべしとする者は、サヸニイ[五八]により て開かれたる歷史法學派なり。氏の高弟にプフタ[五九]

五八　Friedrich Karl von Savigny: Geschichte der römischen Rechts im Mittelalter. 7 Bde.

五九　Puchta: Juristische Encyklopädie.

あり、英國にはメイン[六〇]あり、更に羅馬法制の研究にはダンツ[六一]、カロワ[六二]、イヘリング[六三]の諸家あり、獨逸法律にはブルンチル[六四]、ワルテル[六五]あり、近者亦スチンチング[六六]あり、駸駸たる流勢、今に於いて益〻盛大を見る。乃ち復歷史法學の一派として、特に比較法學に從事する者にはコオレル[六七]あり。

斯くして法律現象の科學的研究漸く進むに隨ひ、其原理の探究亦漸く進みて、玆に再び哲學等より其補助を得むとする徵なる徵候を呈し來る。[六八]翻りて政治學の方面を觀れば、全體としての發達は爾來未だ幾許もなく、唯其部分的發達は、グナイスト[六九]、スタイン[七〇]等によりて行政學及國法學を成し、近者グムプロヰッツ[七一]ありて益〻政治其者の研究より遠さかり、先づ直に社會學其者を研究するの要を感

六〇　James Sumner Maine: Ancient Law. 1866.
—: Dissertations on Early Law and Custom. 1883.
—: Lectures on the Early History of Institutions. 1875.
—: Village communities in the East and in the West. 1876.

六一　Dunz: Lehrbuch der Geschichte des römischen Rechts. 1871-73.

六二　Karlowa: Römi. Rechtsgeschichte.

六三　Rudolph von Ihering: Geist des röm. Rechts auf den verschiedenen Stufen seiner Entwickelung. 3 Bde. 1877-88.

六四　Brunner: Deutsche Rechtsgeschichte. 2 Ede.

六五　Walter: Deut.

Rechtsgeschichte.

六六 Stinzing: Deut. Rechtsgeschichte.

六七 Kohler: まとまれる大著なし。

六八 Ihering: Zweck im Recht, Kampf uns Recht の二書の如き歷史的研究の素地の如何に卓獨に法理の研究に不充分なるかを證す。

六九 Rudolph Gneist: Der Rechts-, Staats-, u. Verwaltungsgeschichte im Deutschland, 1879, etc.

七〇 Lorenz von Stein: Gegenwart u. Zukunft der Rechts- u. Staatswissenschaft. 1878.

—: System der Staatswissenschaft. 1852-56.

七一 Gumplowicz 曇に Oesterreichisches Verwaltungsrecht の著數種ありしが

ぜり。トライサケは(七二)其歷史に於ける堪能より聊か社會學を研究し、近時又政治學を出だせるも、其素地の不完全は、氏をして格別の成功を遂げしめず。ラッツェンホオフェル(七三)の政治の研究は、明に此進歩の潮流を代表し、政治の研究を以て全く社會研究の應用的一面に歸し了れり。

之を要するに、法律は其原理の研究に於いて、政治は其完全なる研究に於いて、卽ち學科の組織其者に於いて、全く自立の覺悟を有すること難く、乃ち相胥ゐて更に包含的なる更に根本的なる一學問に向うて進まむとする、實勢然るなり。

第九節

オオギュスト・コムト

Sociologische Staatsidee, Grundriss der Sociologie, Sociologie. u. Politik. 以て皆に社會學の研究に須つ所以を述べ終に全く社會學者となり了せり。

七一 Heinrich von Treitschke, Gesellschaftswissenschaft, 1859. Politik. 2 Bde. 1897. (氏の講演を死後出版せるもの)

七二 Gustav Rutzenhofer: Zweck u. Wesen der Politik, 3 Bde. 1898.

最近世の歐西社會及思想の變動は、五項の特象を呈し、六項の流程に由りて、以て人文の開展を促進せること、上來節を累ねて觀來れる所の如し。乃ち斯人文開展の齊一に要求する所に隨ひ、其歸託の根基を與へ、其發展の中樞を供ふる者、早晩必ず出でざるを得ず。人文開展の勢、未だ見、今の如く顯著ならざるに際して、夙く既に這大勢を洞察し、此使命を全うせる者は、オオギュスト・コムトの社會學卽ち是なり。

コムトの學界に於ける地位は、孔子、プラトオン等と同しく、有史以來其當時に至る、人間知識の造詣を攬要して、以て人生の究竟問題を解釋し、直に眼下の社會の救濟其事に充てむと企圖せる者に外ならず。知識界を體系的に

七四 Comteの著書は約左の如し、後人の蒐集又は述べたる者を附記す。

1) Cours de phil. pos. 6 vols, 1830-42.
2) Cours de pol. pos. 4 vols. 1851-54.
3) Principe de phil. pos. 1868.
4) Catechisme positiviste. 1800.
5) Synthèse subjective, ou, système universel des conceptions propres à l'Etat normal de l'humanité. 1856.
6) Discours sur l'Esprit positif, 1898.
7) Appel aux conservateurs. 1855.
8) Septe d'Aug. Comt à Antoine Etex. 1895.
9) Lettres d'Aug. Comte à M. Valat. 1815-44.
10) Testaments de la religion positiviste.
11) Discours sur l'ensemble du positivisme. 1848.

總攬して、更に一進轉を成し、社會といふ新なる對象を附加せるは、卽ちコムトが當時に至る學問知識開展の大勢上看破し得たる必要なりしなり。世或はコムトを以て所謂科學的社會學の創始者とする、誤れり。氏の實理哲學體系は斯性質を以て出づ、實に一八三〇年より四二年に至る十有二年の苦辛なり。[七四]凡そコムト、孔子、プラトオンの如き、之を哲學者と呼ぶも可、之を社會學者と呼ぶ亦可、要は眞個の意味と史上の地位とを閑却せざるに在り。今其學問の精神を要約すること左の如し。

第一、學問の目的は人生社會に存す、學問の意義は人生社會の要道を指示するに存す、道は一定の理想に向うて導く所以の徑路なり、是故に近世學問の進歩は千徑萬條なりと雖も、其共に有する所の意味は必ず一に歸せざる可からず、今や學問知識を統整して其天職本分を全うせむと欲せば、此目的を把持せざる可からず。

且[七五]客觀世界は亦唯、渾然たる一體のみ、萬物は實に一體なり、之を開けば客觀的一體及主觀的一體となる。前者は唯物論の分野に應ず。心的一體は客觀的なるを得ず、其完全及確立は、神に歸向するよりも人道に歸向するに於いて存す。是故に這般萬物の渾一に應じて、學問亦一あるべし、二ある可からず、學問の渾一は新學問の第一義なるべく して、卽ち一部の實理哲學體系ある所以なり。

第二、學問の體統。學問は渾一なるべし、洩すことある可からず、亦遺棄するあるを容さず。而も學問の歸向は自

12) Opuscules de phil. sociale. 1819-28, 1888.

顯現する者逸には左の如きあり。

1) La sociologie par Aug. Comte, résumé par. Emile Eigolaye. 1897.
2) Essai hist. et crit. sur la sociologe chez Aug. Comte, par Franck Alengry. 1900.
3) Phil. d'Aug. Comte.
4) Edward Caird: The Social Phil. and Religion of Comte. 1885.
5) Rud. Euc'ken: Zur Würdigung Comte's u. des Positivismus. 1889.
6) Hermann Gruber: Aug. Comte, der Begründer des Positivismus. 1889.
7) Lietz: Die Problème im Begriffe der Geeellschaft bei A. Comte. 1891.
8) Littré: Auguste Comte et la phil. pos.
9) —: Phil. pos. par Aug. Comte. 1868.
10) Maximilian Brüll: Der Positi-

ら既に定まるといへば、其目的に歸趣するの親疎遠近より、及知識の論理的體系の關係より、學問は必ず一條の體統に於いて整へられざる可からず。大體に於いて命名する、乃ち數學、星學、物理學、化學、生物學、社會學、の體統を成す所以なり。[七六]

第三、實理的學問。學問の目的を達せむが爲には、必ず實理的方法に賴り、實理的性質を備へざる可からず。實理的とは何ぞや、曰ふ、其特質四あり、實在的其一、實用的其二、正確其三、精密其四、是れ卽ち實理的學問を一切の他の哲理的思辨より區別する所の者なり。[七七]新學問の研究は觀察及推理の兩面を具備し、主觀客觀の兩面に通じ、堅確なる基礎の上に、洽く學問の方法を求めざる可からず。是に於いて新學問は、學問三段の方法的進步に於いて、特に必ず其第三最上の形式を取らざる可からず。

第四、人道的學問。人道教の要諦にいふ、愛を主義と爲し、秩序を基礎と爲し、進步を目的と爲すと。[七八]新學問は、一言にして之を蔽へば、曰ふ、人道的學問なり、人道を對象とする學問なり、人道に由り、人道を明にし、人道に進む、是れ新學問の面目なり。謂へらく、實理哲學の目的は二に約すべし、社會及道德の學問を實理的にする事、其一なり、一切の實理的觀念の總體を人道の觀念により統整する事、其二なりと。[七九]人道は新學問の起點にして亦歸點なりとす。

斯の如き規模と抱負とを以て其學問の程を發する者、卽ちオオギュスト・コムトの學問なり。[八〇]斯かる學問は、必ず社

---

11) Pünjer: Aug. Comte's Religion der Menschheit; Der Positivismus in der neueren Phil.

12) Sommer: Die pos. phil. Comte's. 1886.

13) Heinrich Waenlig. Aug. Comte u. siene Bedeutung für Entwickelung der Socialwissenschaft. 1894.

七四　Discours sur l'esprit pos. p. 11-20.

七六　Cours de phil. pos. vol. I. p. 7.

七七　Discours sur l'esp. pos. p. 80.

七八　Synthèse subjective 等の書に記せらる。

七九　Discourss ur l'esp. pos. p. 87.

八〇　Ingram: Phil. Hist. of Pol. Econ. p. 197. 亦 Comte の綱領を擧ぐ。

會學を以て其體統の終極と爲さゝるを得ず、而してコムトの學問は直に又社會學の鼻祖となれり。

コムトの著述は、最も主要なる者を實理哲學體系と爲し、其學問的方面の一切の基礎となり、總轄となる。之に次いで其實用的方面の大著述は、卽ち實理政學體系なり。此二著を以てコムトの敎學は乃ち全し、他の諸の著述は、要するに右二著に現されたる意義を反復絮說する者に外ならず。

社會學は斯くして其成形を得たり、其由來の尋常に非ざりしことは、以て其將來及其性質の亦尋常にして止むべからざるを察するに足らむか。

第十節　コムト以後の社會學

コムト以後、今日に至る社會學の變遷を敍するに、二樣の方式は存し得べし、一は時代に隨うてする者、二は國別に隨うてする者、是なり。時代に隨ふ者は最も變遷の大勢を敍するに適するも、爾來未だ半世紀に滿たざるの間、前人の後人に影響するよりも、國別に特有なる思想界の性質寧ろ學者に大なる關係を有するが故に、今は第二法を取りて敍述を成さむとす。[八一]

コムト以後の社會學は、一言之を蔽へば、部分的繼承及發達の歷史を有せり。儒學の孔子以後に於けるが如く、希臘哲學の晩期に於けるプラトオンの哲學の如く、繼いて

八一　各學說學派については第一篇第二章第五節の註文により、以て看るを得べく、以て此節を補ふに足るべしとす。

出づる所の社會學は、或る部門に於いて時に精詳を加ふることあるも、到底コムトが學問の規模に似るべき者あらず。全體より之を謂へば、量に於いて盛なるも、質に於いて衰退の歴史と斷せざるを得ず。

コムトの本國たる佛國には、コムトの後直にケトレエ[八二]出で、其得意なる統計の應用により、所謂大數計量の方法を以て社會現象の理法を求めむと擬す、其意蓋し社會現象の理法亦自然界の因果律の如く求むべく、而して社會進化の理法亦此に由りて明なるべしと信せるなり、卽ちコムトの實理的方法の一誤解や、先づ唯物的に趁れる者なり。次いでルプレイ[八三]あり、記述を基礎とせる一種の統計的方法を以て社會の理法を求め、社會の改革を成さむと期す、其斷案に貴ぶ可き者少しと雖も、研究の過程に取るべき貢獻少からず。而して乃ちルトゥルノオ[八四]あり、著書等身、純ら記述的方法を以て方法的分類を用ゐ、以て社會學を組成す、到底記述的社會學たるを免れざるも、其斯學の與件資料に貢獻せる、蓋し偉功と謂はざる可からず。當時問題の尙未だ渾沌たる、クレマンの彪然たる著述あり[八五]、社會の倫理統制及文明の論議よりして凡百の社會事項に亘り、規範的說述を試みたるもの、往往にして後世最進の學說を想はしむる者なきにあらず。實理的方法を紹述して社會學の論理的結成に志ある一方の雄には、フイエエ[八六]、クウルセル・スノエユ[八七]等先づ出で、同時に不撓の意氣を以て、社會主義の實地運動をば、手を以て併せて筆と舌とを

多し、以て其勢力を看るべし。

E. de Curzon: Frédéric Le Play. Sa méthode, sa doctrine, son oeuvre, son esprit. 1899.

M. Vigne: La science sociale d'après les principes de Le Play. 2 vols. 1897.

Paul Ribot: Exposé critique des doctrines sociales de M. Le Play. 1882.

八四 Charles Letourneau: La Sociologie. — : L'évolution de la morale. — : L'évolution du mariage et de la famille. — : L'évolution de la propriété. — : L'évolution juridique dans les diverses races humaines. — : L'évolution de la guerre. — : La Biologie. — : Science et matérialisme.

八五 Ambrois: Clement Essai sur la science sociale. 2 vols. 1867.

八二 Quetelet: (1796-1814) Histoire naturelle de société. — : Du système social et des lois qui régissent. 1848. — : Physique sociale, ou Essai sur le Développement des Facultés de l'homme. 2 vols. 1869. 氏の Physique sociale といふ題號は Condorcet の助言を採用せるものにて其意實に社會の進化發達の規定も天然的理法に隨ふこと毫も天體の運行に異ならざるを表せむが爲なりといふ。Bordier: La Vie de société 序

八三 Le Play: (1806-1882) La Réforme sociale en France. — : Organisation de la famille. — : La réforme en Europe et le Salut en France. — : La constiution essentielle de l'humanité. 尙ルプレイについては左の諸著を始め數

以てするに懈らざる者マロン[八八]あり。近時フィエエは蘊蓄を積み、面目を一新して、其活力今猶毫も衰へず。漸く健全に近づける思想を以て熱心に研究を成しつゝあるは、氏の外にザュルケイム[八九]、タルド[九〇]、ホルザエ[九一]、ルストラアド[九二]あり、但し終の二氏は甚だ遠く聞えず、就中ザュルケイムは主として研究法に關する研究を成し、近時漸く特殊事項の研究に向ひ、タルドは最も獨創の方式に隨ひて社會の理法就中心理的理法を尋繹す、而して往往牽合の弊を免れず。近時主として心理的研究を成せるをルボン[九四]とし、頗る抽象的なるをイズウレエ[九五]とす。ジロオ、ユウロン[九六]は進化の事實研究を以てルトゥウルノオに壘を對し、チルムス[九七]は未だ目覺しき著述を與へざれど、活潑に斯學界に斡旋して、名望嘖嘖たり。

佛國と舞臺を同しうするもいふべき白耳義にては、經濟學の見地より健全なる社會觀を有するラヴレイ[九八]、及研究法に熱意し漸く種種の有益なる著述を供し、而も未だ體系を成すに至らざるド・グレエフ[九九]あり。

露西亞は其主なる學者の舞臺を多く佛國若くは佛語の著述に有するが故に、佛國に次いで之を此頁に記するを當れりとす。其斯學に於ける發達は最も近時に係る、唯リリエンフェルド[一〇〇]は漸く二十餘霜の經歷を有する學者なるのみ、而して其學說、亦其經歷に相應し、固く有機說を持し、老いて益〻壯なり。乃ち現時最も知られたるはノヂコフ[一〇一]、ド・ロベルテイ[一〇二]、カワレフスキイ[一〇三]なり。ノヂコフの國際競爭

八六 Alfred Fouillée: Science soc. cont.
八七 Courcelle-Seneuil: Études sur la sc. soc.
八八 B. Malon: Socialisme integral. 5 vols. —: Histoire du socialisme. 5 vols.
八九 A. Fouillée: L'évolutionisme des idées-forces. —: L'avenir de la métaphysique, fondée sur l'expérience. —: Psychologie des idées forces. —: Mouvement positiveste. —: Mouvement idéaliste. —: France au point de vue morale. —: Psychologie du peuple français.
九〇 Emile Durkheim: Division du travail social. —: Les règles de la méthode sociologique. —: L'année sociologique. 此新雜誌なり。
九一 Gabriel Tarde: Les lois de l'imitation. —: La logique sociale. —: Les lois sociales. 此二書之れの出著なり。 —: Le transformisme du pouvoir, 1899. —: Essais et méthode sociologique. —: Etudes de psychologie sociale. —: Philosophie pénale.
九二 A. Bordier: La vie des societés, 1889.
九三 Combe de Lestrade: Elèments de sociologie, 1889.
九四 Gustave Le Bon: Les lois psychologiques de l'évolution des peuples. 1894. —: Psychologie des foules. 1895.

の研究は、最も獨歩の地位を占むる者といふべく、ド・ロベルナイは斯學の性質を研究し、カワレフスキイ亦徐徐進化の事象に研究する所あり、就中家族體制については頗る得る所あるものの如し。リリエンフェルドの外、獨逸語の作者は、クラカウのダルグン[一〇四]氏あり、氏も亦制度の沿革につき、社會靜學に貢獻すること尠からず。露西亞の國語を以てする學者は、不幸にして多く世の知る所とならざれど、今少くとも二氏を數へざる可からず一はロオロフ[一〇五]にして、他はナェエク[一〇六]なり、ナェエクは社會學を呼びて人間運命學と爲せり。茲に遺るべからざるは、波蘭の記者にして、露帝の平和會議提唱の精神的原動力となりしといふ有名の大著、將來の戰爭其技術的經濟的及政治的意味の作者

九五 Jean Izoulet: La cité moderne et la métaphysique de la sociologie. 1894.
—: Les quatre problèmes sociaux. 1898.

九六 Giraud-Teulon: Les origines du Mariage et de la famille.

九七 René Worms: Organisme et Société. 1896.
—: Philosophie des sciences sociales. 1908.

九八 Eiuile de Laveleye: De la propriété et de ses formes primitives.
—: Le socialisme contemporaine.

九九 Guillaume de Greeff: Introduction à la sociologie.
—: Les lois sociologiques. 1893.
—: L'évolution de croyence et des doctrines politiques. 1896.

—: Le transformisme social. 1896.

一〇〇 Paul von Lilienfeld: 『參』

一〇一 Jacques Novicow: La politique internationale. 1886.
—: Les Luttes entre sociétés humaines. et leurs phases successives. 1898.
—: La guerre et ses prétendus bienfaits. 1934.
—: Essai sur notation sociologique. 1895.
—: Conscience et volonté sociales. 1897.
—: Les gaspillage des sociétés moderne.

一〇二 E. De Roberty: La sociologie. 1893
—: La philosophie du siècle.

一〇三 Maxime Kovalewsky: Tableau de l'origines et de l'évolution de la famille et de la propriété. 1890.

なるブロック[一〇七]、及露國現時の時代精神の一表現といふべき莫斯科雜纂[一〇八]の著者怪傑ポビェドノスツェフなりとす。

翻りて以太利を看るに、此國に於いても斯學研究の氣運は大に開かれ、其刑法刑事人類學者は、最も此氣運の爲に力を効せり。フェルリ[一〇九]、ガロファロ[一一〇]、ロムブロソ[一一一]是なり。之に次いではコラヤンニ[一一二]あり、純ら社會學に盡す者にはロリア[一一三]、マヨランナ[一一四]、デ・ベラ[一一五]あり。

ヴダレパパレヴン[一一六]ニ、ピレニイズ山脈の南にも、亦近時斯學研究の機運は盛にして、就中ポサダ[一一七]、エスカルテン[一一八]あり、着着として其研究の歩を進む。其關係ある民族の出と、其著書は既に佛譯を得、其他デ・パレデス[一一九]あるを以て茲に南米智利に於ける吾人の同學フィゲラ[一二〇]を擧げざる可からず。

羅甸民族の諸國に於ける斯學研究の隆運斯の如し、乃ち英米二州に察する、其盛亦相讓らざる者あり。英國といへば直に人の聯想に入り來る者はスペンサルの名なり、その斯學に於ける効績は今絮説を要せず。其他同しく原始文明の研究を以て有名なるラボック[一二三]、マクレナン[一二三]、モルガン[一二四]、タイロル[一二五]、等は皆不朽の述作あり。近時文明史より斯學に貢獻せる者にはフリント[一二六]あり、其他斯學の實用及普及に營營たる小作家には、バックス[一二七]、フェルガッソン[一二八]、ハアリス[一二九]、ハックスレイ[一三〇]、ロリマル[一三一]、マッケイ[一三二]、論理學及經濟學の大家ジェヂンス[一三三]、あり、之を先にしてミル、カアライル、メインあるが如く、之を後にしてマッケンジイ[一三四]出でて斯學の嚮ふ所を定むるに力を効し、其功亦小ならず。

一〇四　Lothar Dargun: Ursprung und Entwickelungsgeschichte des Eigenthums. 1888.

一〇五　—: Soci logische Studi n. 1885.

一〇六　—: Mutterrecht u. Bauhe. 1884.

一〇七　—: Mutterrecht u Vaterrecht. 1892.

一〇八　G. Lauroff 西亞に於ける主親的方法の制始者なり Stein: Soc. Fr. p. 20. 下說を見よ。

一〇九　O. Tche-ki: Essai de Sociologie: science de l'organisation de la société hamanitairement heureuse. (佛蘭) 1884.

一一〇　Johann von Bloch: Der zukünftige Krieg, in seiner technischen, volkswirthschaftlichen u. politischen Bedeutung. Berlin. 1899.

一一一　C.-P. Pobedonostzeff: Questions religieuses, sociales et politiques, Paris 1897. 原書は Récuil de Moscou. 1896.

一一二　Enrico Ferri: Socialismus u. moderne Wissenschaft. —: Criminologie. —: Homicide.

一一三　Garofalo: La superstitionssociales.

一一四　Lombroso.

一一五　Colajanni: Socialismo e sociologia criminale.

一一六　Achille Lorin: Die sozialogie. Ihre Aufgabe, ihre Schulen und ihre neuesten. Fortschritte. 1900.

一一七　Vadale-Papale: Darwinismo naturale e Darwinismo sociale. 1892.

一一八　Ichilio Vanni:

轉じて大西洋の彼岸を見れば、嶄然として頭角を見せる者はギッディングス[一三五]なり、氏の分析的心理的研究は、確に一時期を劃するに足る者。乃ち之に對立するはワアド[一三六]にして、曩に英剛の氣を驅りて動學的社會學を著し、名を天下に馳せしが、近時更に斯學界最新の空氣を吐呑して、熱心其體系の更始に從事し、乃ち純正社會學の好著あり。其他未だ大著なきも、而も熱心なる研究者、教師としての斯學普及者、スモオル[一三七]、ヂンセント[一三八]、ヘンダルソン[一三九]、ロッス[一四〇]あり、小なる者にフェアバンクス[一四一]、バスコム[一四二]、クロエル[一四三]あり、而して最も忘るべからざるはコムトの繼承者ケエリイ[一四四]なりとす。

最後に現時最も學問を以て世に誇視する獨逸、及これと言語を共同にする諸國を看るに、最も驚くべきは獨逸

に於ける斯學の甚だ振はざるに在り。[一四五]抑、かかる奇異なる事象の原由に關しては、瑞西の大家ル・スタイン、之を說いて曰ふ、其因由二あり、斯學が幼稚なりしや、殊に佛國に於いて往往空想的に流れ、或は激烈なる運動を伴ふこと、其第一由にして、獨逸社會は此に不安心を懷くなり、第二由は所謂歷史哲學なる者、ヘルデル、カント、フィヒテ、ヘエゲル、及マルクスを經て、此國に發生し、此國の學者は此を以て自國特有の傳家寶と做し、以て之と同體異名なる社會學の要を認めずと爲すなり、然れども彼等は謬れり、歷史哲學と社會學とは、社會の發達といふ問題を共通にするのみ、其解明の形相は全く相異なるに非ずやと。[一四六]評說頗る鑿てりと謂ふべきも、尙未だ緊處に至らざるものあり、獨逸の學者が近代の一統帝國の建立に與りて大功ありしだけ、彼等は御用學者の譏を免るる能はず、今に至るまで、此國是の爲には、あらゆる價を拂ひ、學問上の事項をも甘して是に供犧するは、此國學者の異彩たり。彼等の思辨的頭腦、歷史哲學の社會學と到底別種の學たるを辨識せざるに非ざるも、好みて帝國の國是に反對する社會民政主義と疑似の體相を有する所の社會學を取り、自國の寶物たる歷史哲學をこれに隷屬せしめむよりは、寧ろ歷史哲學、文明史、比較人種學、比較言語學、歷史的法制美術俚諺宗教の研究、及國家學等によりて其實體を得るを便なりとするのみ、乃ち異名にして而も斯學に貢獻せる者、スタインの擧ぐる所を以てするも、文明史にはロホル[一四七]及リッペルト[一四八]

Prime Linee di un programma critico di sociologia. 1886.

一一六 Angelo Majorana: I principii della sociologia. 1891.

一一七 De Bella: Corso de sociologia. 1895.

一一八 A. Posada: Les théories modernes sur l'origine de la famille, de la société et de l'Etat. 1895.

(續論)

一一九 Eduardo Sanz y Escartin: El individuo y la reforma social. 1896.

(承前)

—: El Estado y la Reforma social. 1898.

一二〇 V. Santamaria de Paredes: El concepto organismo social. 1896.

一二一 Oxilio Figuerra: Igualdad fundamental e Igualidades secundarias. 1899.

一二二 Sir John Lubbock: Origin of Civilisation. —: Prehistoric Man.

一二三 McLennan: Primitive Marriage.

一二四 Morgan: Ancient Society.

一二五 Edward Tylor: Primitive Civilisation.

一二六 Robert Flint: Phil. of History.

一二七 Belfort Bax: Ethics of Socialism. —: Religion of Socialism. —: Outspoken Essays on social Subjects. 1897.

一二八 J. Helenus Ferguson: Philosophy of Civilisation. 1890.

一二九 George Harris: Moral Evolution.

あり、經濟史的研究にはハンセン、マイツェン、イナマステルネッグ、クナップ、ラムプレヒト、シュモルレル[一四九]あり、國家學的研究にはフォン・モオル、フォン・スタイン、及グナイスト[一五〇]あり、比較法學的研究にはコオレル及ライスト[一五一]ありとす。而も此國の土地亦必ずしも本然に斯學に取りて磽确不毛なるに非ず、卓識の士はよく此間に立ちて斯學の勇將となる、乃ちシェフレエ[一五二]あり、クロオン[一五三]ありて、最も社會學の尙ぶべきを論ず、近時更にトェンニイス[一五四]及ジムメル[一五五]ありて盛に斯學の攻究に從事す、シュミットワルネック[一五六]の著の繼がざるは、惜む可し。

墺國には近時の大家グムプロヰッツを出だし、其門下乃ちラッツェンホエフェルあり。瑞西には親切なる研究者スタイン[一五七]を出だせるは、羅甸民族に對して聊か顏色を加ふる者、殊に獨墺の重を回復するに足るは、リンドネル、ラツァアルス、スタインタアル、ヴント等によれる社會心理學的研究即ち是なり。

其他の諸國、丁抹にスタルケ[一五八]あり、匈牙利にマンデロあり、プラアグにマサリック[一五九]あり、ブリュクセルにダルマアニュあり、凡そ大學の所在地、殆ど有數の社會學者を有せざるなし。

斯學に關する各種の學會も、世界の各地殆ど皆之有り、其特に大なる者、佛國巴里に事務所を置ける萬國社會學協會を主として、其數十に下らず、是等は皆機關雜誌[一六〇]を有して、盛に研究の成果を公にす。

社會學の現況略〻斯の如し、其將來亦想見するに難からざるなり。

一三〇 Thomas Huxley: Social Diseases and worse Remedies. —: Social Essays (獨譯) 1897.

一三一 George Lorimer: Studies in social Life. 1886.

一三二 Thomas Mackay: Methods of social Reform. 1896.

一三三 Stanley Jevons: Methods of social Reform. 1818.

一三四 John S. Mackenzie: Introduction to Social Philosophy. 1890.

一三五 Franklin Giddings: Principles of Soc. —: Theory of Socialisation. —: Inductive Sociology.

一三六 Lester F. Ward: Dynamic Sociology. 1883 —: Psychic Factors of Civilsation. 1893. —: Outlines of Sociology. 1898. —: Pure Sociology. 1903.

一三七 Albion Small: The organic Concept of Society.

一三八 Small and Vincent: Introduction to the Study of Society.

一三九 Henderson: Social Elements. 1895.

一四〇 A. Ross: Social Control. 1901.

一四一 Arthur Fairbanks: Classification of social Phenomena.

一四二 John Bascom: Social Theory. 1895.

一四三 J. Franklin Crowell: The logical Process of social Development.

一四四 H. C. Carey. The

social Science. 3 vols.
—: The Unity of Law, as exhibited in the relation of physical, social, mental, and moral science. 1972.

一四五

一九〇〇年巴里に於ける社會學教授萬國會議に於いて、レキシスいふ、獨逸にて未だ成功せず、而もせざる可からざる學科は社會學なり、獨逸にては今尚其範圍、其事業、其方法について、懷疑的眼孔を以て見られ、すべて今尚批評的爭議の最中なりと。(Loria: Die Sociologie. Heiss 譯序。)

一四六

Ludwig Stein: Soc. Fr. im L. der Phil. p. 23-4.

一四七

Rocholl: Philosophie der Geschichte. 1893.

一四八

Julius Lippert: Geschichte der Familie. 1884.
—: Kulturgeschichte. 1885.
—: Allgemeine Geschichte des Priesterthums. 1884.

一四九

Hanssen, Meitzen, Inama-Sternegg, Knapp, Lamprecht, Schmoller.

一五〇

Robert von Mohl, Lorentz von Stein, Gneist.

一五一

Post, Kohler, Leist.

一五二

Schäffle. 前に見ゆ。

一五三

Ludwig Krohn: Beiträge zur Kenntniss u. Würdigung der Sociologie. 1880.

一五四

Feridinand Tönnies: Gemeinschaft u Gesellschaft. 1887.

一五五

Georg Simmel: Ueber die sociale Differenzierung. 1890.

一五六

Schmidt-Warneck: Sociologie im Umrisse ihrer Grundprincipe. I. 1889.

一五七

Luedwig Gumplowitz, Ratzenhofer, Ludwig Stein. 前に見ゆ。

一五八

C. N. Starcke: Die Primitive Familie in ihrer Entstehung u. Entwickelung. 1888.

一五九

Th. G. Massaryk: Die philosophischen und sociologischen Grundlagen des Marxismus. Studien zur socialen Frage. 1899.

一六〇

その主要なるものを擧ぐれば左の如し。

1) American Journal of Sociology.
2) Institut des science sociale. Annales.
3) Année sociologique, p. E. Durkheim.
4) Institut international de sociologie. Annales.
5) Revue internationale de sociologie.
6) La Réforme sociale.
7) La science sociale suivant la méthode d'observation.
8) Zeitschrift für Sazialwissenschaft.
9) Soziale Praxis.
10) Zeitschrift für Social- und Wirthschaftsgeschichte.

第四章　社會學の將來

第一節　明治時代

社會學の源流を尋ね、其成形を看、其現況を察し來れば、今や翻りて吾が身邊を顧ざるを得ず。今の時は是れ如何なる時代ぞや、其學問的關係に於ける、將に如何の看を爲すべき。明治時代の學問的大觀は、研鑽に從事する者の等閑に附すべからざる所なり。

金甌無缺、萬世一系の皇祚の下に、地勢及人種の特殊なる規定に資して、比類なく自然的自主的開展の二千五百

年の歴史を有し來たる我社會は、第十九世紀の物質的文明開展の大勢の波及を受けて、遂に世界馳驅の場中に入る。是より先、皇權下移、武門柄を秉り、建武の中興は終有るを得ず、室町の豪華巷塵に迷うて、世は應仁の亂離に苦み、群雄の割據蓋世の雄者を促して、竟に德川一統の太平を得たりしも、我國體の本然は更に一個問題の解釋を閉却するを許さず、智略千載に絶せる東照權現も、居る所の地位の逆なるが爲に、此に向うて、智も施すに由なく、僅に強壓と彌縫とを以て此間に處せり。家康百箇條によりて固められたる城壁は、實に其基底に公武法制十八條のダイナマイトを藏せしなり。

歐州の近世史が王權の下に國家的發達を遂げ得て乃ち王權の誤用に反抗する思想運動の連續を表現せると、我舊幕の歴史が久しからずして尊王斥覇の隱然たる思潮の暗流を示せるとは、社會の勢何處を以て均齊を得たりとするべきを知らず、我に在りては、應仁を以て無均齊の極に達せる社會が、次第に均齊を回復するの途に就き、德川の太平に至りて、唯一歩の差を以て不安定均齊に止まれる者なりしなり。而して此一歩や實に日本社會統治の上に於ける皇室と覇府との關係にして、苟くも統治の實質的能力だに存するあらば、乙の甲に讓る可きは當然なりし者、歐洲の王權と民權との關係が、一の當然を容るゝの餘地なかりしの比に非ざるなり。

德川時代の學者は、優孟衣冠の徒を除き、苟くも社會に眼を注ぐの眞儒は、直に此大勢を看取するを過たざりき。乃ち水戸の德川光圀及其學派、京都の山崎闇齋、山鹿素行、備前の熊澤蕃山を始として、此問題の解釋に熱意する思潮は、脈脈として暗に相續けり。次いで新井白石あり、讀史餘論の作は正に此問題の解釋の爲に成れる歷史哲學と稱すべし。歷史を達觀して社會將來の方向を論定する、建武の時、曾て一たび源親房あり、光圀白石の事業は皆此遺意を紹ぎ、未だ去らず益切迫する時勢同一の必要の爲に、其解釋の光明を與へむと擬せる者、而して百年を隔てて遠く之を承けたる者を賴山陽と爲す。諸側面より之を助くる者、蒲生秀實の九志あり、高山正之竹內式部等の行實

あり。之を德川時代社會學の源流に於ける本流と爲す。

社會體制の根本問題に觸着する此本流的思潮の外に、尙二條の遺る可からざる傍流を認むべし。第一は階級及貧富の關係に對する社會問題の思潮なり。蕃山曩に之を論じ、大鹽中齋に至りて最も盛に之を論じ、亦隨うて躬ら其實行の犧牲と爲れり、但しこれ到底當時の社會體制とは兩立すべからざる理想なりしが故に、本流的解釋は必ずこれが先決問題たらざる可からざりし者。第二には外國との關係に對する問題の思潮なり。德川時代の初、仙臺の伊達政宗が竊に羅馬との交通を營める、未だ必ずしも大なる意識的行動と認む可からず、德川將軍の第十七世紀に在りて鎖國政策を斷行せる、亦未だ必ずしも純然た

る不自然の事と謂ふ可からず、第十八世紀に至り、第十九世紀に進み、太西洋の航海、印度半島無盡藏の富、歐人の指を染め事に慣るゝに至りて、乃ち所謂世界の大勢なる者茲に一大進轉を成す。德川氏當時の政策の効果、曩日西南の鵬程遙に南亞の各地に殖民の雄圖を成就せし國民も、今は大勢の作り手にあらず、作られ手として働くの止むを得ざるに至れり。而して蕃舶及流民より齎されたる僅少の材料も、智能の敏捷鋭利なる識者には、既に稍稍として外圍の大勢の進動を卜知せしむ。此進動的大勢に徴して、我國是の將來と、現行政策及社會體制との關係如何を疑ひ始めたる者、乃ち德川時代に於ける國際問題の思潮なりとす。此問題に對しても、驚く可き熊澤蕃山は實に豫言者的態度を以て、第十七世紀に於いて夙に之を論ぜり。爾後青木昆陽あり、殊には林子平あり、渡邊華山、高野長英等出でて此思潮大に高まり、以て德川の末世に至る。

此時に當りて遂に時勢は破裂せり。浦賀の礮響は導火管の破裂の音のみ。三箇の問題相合して、志士は最早言論と、思想とに堪へず、直に實行上の解釋を企てたり。吉田松陰、佐久間象山、藤田東湖、橫井小楠等、多難奔走の際に述作せる所、亦我思想史に貢獻するに足る。而して王政復古卽維新の鴻業は成り、德川三百年の醞釀に係る我社會學的思潮は、始めて茲に實地上の解釋を小成せり。

王政維新は、之を歐西の近世史に求むる、强ひて佛國革命に比すべし、唯其均齊の彼に在りて不安定に、此に在り

明治時代に出でたる德川時代に於ける思想に關しては、吉田東洋、近藤正齋、佐久間象山、橫井小楠、渡邊崋山、高野長英、藤田東湖、會澤正志齋、藤田茂吉、吉田松陰、佐藤一齋、大鹽中齋、山鹿素行、伊藤仁齋、荻生徂徠、本居宣長、平田篤胤、安藤昌益、海保青陵、佐藤信淵、二宮尊德、大原幽學、林子平、上杉鷹山、細井平洲、賀茂眞淵、村田春海、塙保己一、屋代弘賢、狩谷棭齋、伴信友、小山田與清、松平定信、尾藤二洲、古賀精里、柴野栗山、岡田寒泉、寺門靜軒

で安定なるは、最も注意す可き差點たり。實地上の解釋の後には、更に既往を總束して將來を示命する人間の意識靈覺の照耀なかる可からず、是れ佛國革命の後にオオギュスト・コムトの出でたる所以、乃ち我維新以後の思想に就いて一瞥する、亦最も緊要なるべし。[二]

實地の解釋に繼いで明治時代實地指導の勢力ある思想となれるものは、福澤諭吉氏の物質的功利主義、新島襄氏等の基督教的精神主義、最もひろく社會一般の人心を支配し、政治經濟社會上に在りては、板垣退助、馬場辰猪、中江篤介諸氏を首唱者とせる佛國流の自由平等主義、大隈重信、小野梓等諸氏を指導者とせる英國流の秩序的進步主義、ついで官府に據り獨逸を典則とせる國家主義は伊藤博文氏を先覺とし、既にして基督教徒の思想家亦米國を典則とする平民主義を唱ふるあり、紛紛として甲是乙非、外國の思潮に棹して以て自國の匡濟を計る、間亦以て私を濟すの具に供するあり。獨立の社會ありて獨立の思想未だ立たず、乃ち聊か玆に觀る所あり、慨然立ちて自主自由の眞個の解釋を與へむと擬せる者を、三宅雄二郎、陸實、谷干城諸氏の提唱に係る國粹保存旨義と爲す、是に於いて國民的自覺は漸く玆に喚發せられ、國語、國史、亞細亞の文學及哲學の研究等、漸く起りて、以て漸次此旨義が要求する方式を充實するの途に向ふ。但今に於いて國粹旨義の成功を論ずる、主として消極的方面に在りて、未だ積極的方面に及ばざる者に似たり。

二　維新前の思想についても、後の者についても、玆に多頁を割くに堪へず、唯大綱を持するのみ、其詳說にして各個人物に關する事は、人の多く知るる所、甚だ大切ならざらむか。前者は拙著隆象山日東の章、後者は哲學大觀附錄第二明治思想の變遷を以て參看に充つべし。

更に學問的探究の方面に向うて社會學的意識の表現を求むるに、寧ろ割合に寂寥の感なきにあらず。維新以降、文物制度漸く緒に就くといふも、當時破壞の餘、未だ建設を得るに至らざる者、比比皆是なり。而して所謂學者の要する所、詩人の營む所、直に西歐の假相を猴似して以て社會の進歩に貢獻する所以と爲さゞりし者、果して幾許ぞや。福澤氏の著述、帝都の紙價に影響せるも、學問的組織は遂に斯人に期す可からず、中村正直氏、其人觀るに足るも、其著は唯修養個人の具たるに止まり、西周氏學語の創定に功あるも、教學の影甚だ薄く、西村茂樹氏晩年に至るまで熱心なる運動を懈らざりしも、亦個人修養を云云するに過ぎず、我在來の學問にして明治の法制社會の實地に輔助たるを許されしは、唯小中村清矩氏の皇室典範に對する貢獻あるに過ぎざりきとは、如何に奇態にも情なき次第ならずや。獨逸の獨立及統一の運動は、先づギョエテ、ヘルデル、クロップストック、ヘエゲル、ワグネル等、學者、文士、樂家の手によりて其基礎を成し、而して維廉皇帝及ビスマルク、モルトケ等の將相によりて其建築を成す。外國の法制を基礎とし、參するに自國の法制慣習を以てして、法制乃ち成る、成りて而して怪まざる政治家、成さしめて而して愧ちざる學者、抑、時運の尚早に失し改革の他動的なるが爲と謂はむか。獨逸學問の精英を咀嚼せる加藤弘之氏は、社會學者を以て自ら任ずる人、其著人權論は、歐洲に於いて刊行せらる、世界に貢獻するの時運既に至れりとせば、

必ず自國に貢獻する者既に足れるか、若くは自國を通して世界に貢獻する者ならざる可からず。外山正一氏は二十年間帝國大學の講座に社會學を講じ、孜孜として勤めて倦まざりし人、其著述は神代の女性及宗教に對する我信界の外、社會學的には太だ觀るべき者なきも、氏の薫育の功は必ず應に他日に見るゝ者あらむとすべし。且現時耳食の徒、動もすれば社會學と社會主義とを混同し、社會主義を以て破壞主義と見做すに際し、脈脈として斯學の攻究を我帝國大學に絶たざりしは、全く氏の功勞とす。最近十許年、斯學の世界に於ける機運亦一新せるに際し、氏の學說亦有機的進化說より一進轉を成さむとするの兆を呈せるに、幾ならずして氏は職を轉し、爾來實用の材を

三　社會主義に廣狹種々の意義あり、且百年來世界各國の經驗により、社會主義の體說性質亦大に變遷す。其舊く陳きものを今日に於いて踏襲し、輕擧操動を事とするあらば、目するに破壞主義を以てせらるゝ、亦已むを得ざる者。

試むるに忙しく、未だ大に其蘊蓄を聞くあらず、而して夙く摧折の匪運に遭へるは惜むべし。井上哲次郎氏は、夙に東洋哲學研究の必要を學界に唱導し、其時務に對する、亦內地雜居論、教育と宗教との衝突の如き、頗る世の耳目を警覺するに足る者あるも、大學の諸生を教ふるの外、著述に於いて未だ大に見る可きあらず、其哲理的研究の達觀より曩者日本主義の唱導あり、主義としては當年國粹旨義の既に唱破せる者、大に重を爲すに足らざるも、斯主義の實現は必ず先づ學者を須たざる可からざれば、氏の斯主義の後來我社會に及ぼすこと、思ふに獨逸のヘエゲルに負ふが如き者あらむとすらむ。三宅雄二郎氏は、其主張と其社會教育に於ける盡瘁との傍、曩に眞善美日本人、僞

惡醜日本人と題し、民族心理上の著述あり、既にして又我觀小景の基礎的學問的好著あり、天下の學者を批評するに於いて頗る健全にして富實なる見地を有するに似たるも、組織的著述の價値の甚だ大ならざるは、氏の毎に明言する所、乃ち之を氏に望むは無理ならむか、蓋しヲルフとカントとの間を以て時勢を目する者なるべし。

明治の著述界、社會學の有數なるを求めば、先づ有賀長雄氏を推さゞるべからず、社會進化論、族制進化論、及宗教進化論の三著、好し歐西學者に負ふ所尠からずとするも、學界に對する好き貢獻たるを失はず、其帝國史畧の如き、優に斯學の造詣の餘力を見る、但し氏は此頃より國法學者となり、二十七八年戰役の交より國際法及外交學者となる、其他當初には哲學、心理學、及教育學者たりき、此變轉窮なきは氏の非凡なる頭腦を證する者にして、思ふに向後這般を博渉せるの後、再び大なる准備を以て社會學に復歸せらるゝならむ、是れ明治の學界の切望なり。

近者經濟學者の經濟的社會問題に熱意するあり、社會政策學會を立て、眞摯に學術的示命を時事問題に與へむと擬す、其發達や徐徐にして堅確なり、基督教的社會學の微弱なる影、一部の方面に存するに似たれど、固より學界の大勢力となるに至らず。

帝國議會ありて既に十餘年、麟閣の功臣、君國の事に對して猶冲冲の情に堪へず、獻替翼贊、老いて猶骸骨に意なし、而して其所措時に或は常道の外に逸する者あり、世道

一時變象を呈して、風紀頗る紊る。是に於いて外山井上等諸氏の薫育を受けたる大學の青年、最早高遠幽微なる形而上的研究を以て滿足するに堪へず、近時頗る起ちて社會學の研鑽に志し、其成果今に於いて尚觀る可き者少きも、應に異時の好果を期すべきに似たり、而して明治の學風、或は斯邊に自立を成さむとするに至らむか。

蓋し我社會は、獨逸の特殊なる非社會學的體制あるに非ず、佛國の急迫的要求あるに非ず、歐西全般に普遍なる宗教的僻説の先入あるに非ず、而して先進の提携、史上源流の豐富、斯の如く其れ備はる、乃ち斯學の將來に向うて大なる便宜と希望とを託すべき地味は、それ斯國に在るか、噫嘻それ斯國に在るか。

第二節　現代人文の缺點

歐西の社會や、其固有なる單純なる敎により馴致せられたる主我的思潮の蕩流に任せて、學者亦往往豚を抱いて臭を知らず、其狀恰も孔子の聖を以て、尚支那人が夷狄の君あるは諸夏の亡きに如かずといへるに似たり。乃ち一切の學問事業を擧げて、悉く範を歐西に取り中心を歐西に有すべき者とするの獨斷を爲す、是れ實に凡亞利安主義[四]の眞相なり、諸、自立の思想なき半開人、亦其誕を樂みて、中國は文明なり東夷は野蠻なりと稱す、果して然るか。今唯斯學の運命に關する點に就きて、聊か眞摯なる批評を試むべし。

[四] 歐西の識者漸くChristendom の目を厭うて Westerndom の稱を取らむとす、支那文明論の作者 Leroy の如き、これなり、而も其實體は依然として變せず、局外より看れば、其稚氣や愛すべく、其慢心や厭ふべし。吾故に之を呼びて凡阿利安主義（Panarianism）といふ。

社會學の成形や、實に近世人文開展の尖項に位する新學問の必要より起り來れるにも拘らず、コムト出でて後復コムトなく、徒に部分的研究に僻し、若くは好事的事業に陷り、其量に於いて大なる進歩を見て、其質に於いて寧ろ萎靡の態を免れざるは何が爲ぞや。第十九世紀の後半は人文界の明星に乏しからざるも、其大月光明を缺く者に非ざるなきか。

人文に於ける斯大缺點は如何にか其徴を表せる。其標徴や多端なるも、其大綱を攬れば一言にして悉すべし、分業的趨勢即ち是なり。今少しく之を衆方面に察せむか。

分業的趨勢の學問研究に於けるや、乃ち科學的研究を成す。科學的研究は、空間時間及因果に關して容易に分劃すべき所謂有形學の研究に在りては、其功大にして其過小なれども、無形の學、隨うて又人間の學の講明に於いては、功過正に反す、[五]輓近人間の學、實地の學の、進歩に乏しきは所以なり。

分業的趨勢の人間生活の實狀に於けるや、各人職業の相異を生じ、社會的立脚地の相異は感情の睽離を生じ、而も蕩蕩たる潮勢は寧ろ之を以て當然の事項と爲し、所謂自由競爭の說、更に人情自然の弱點を助けて長ずるを爲す、近時社會的改革問題の喧囂良に以あるなり。

分業的趨勢の人間社會の事態に於けるや、衝突、撞着、矛盾は到る處各種の事態の間に發し、而して之を能く裁することなし。法律と道德、自然科學と宗教、政治と社會、美術

五　De Roberty: La Sociologie 亦隨處反駁して之を論ず。

と道德、教育と宗教、等、皆之が爲めに起る所の憐む可き衝突現象にして、這般を認めて當然と爲し、寧ろ益〻之を助長するを以て各部學者美術家宗教家政治家の任と爲すが如きは、其陋悶む可し。凡そ社會は渾然たる一體なり、人間社會に於いて撞着衝突若くは矛盾の起るは、其兩者若くは第三者の間に不完全あるを自證する者。彼科學的研究の眞性眞價を認めずして、妄に科學的研究を囂囂する、度外の徒たり。

分業的趨勢の流弊や、遂に國際關係にまで及びて、各國利害の特質は、經濟上に於いては成るべく分業卽協力を主義とすれども、權力關係は遂に支配を此に及ぼして、各國競うて我利我力を張らむと擬し、而して所謂自由競爭は寧ろ國際關係の常經なりと看做さる、その世界文明の進步の爲に果して久戀の地なりやは、今に於いて識者の一考を價する者たり。

這般趨勢の由來は。歐西文明の性質及發達其者に存して。竝に簡單に敍ぶるを許さず、唯其主目を列記せんか、敎の具はらざる事其一なり、天惠の甚大ならざる事其二なり、國際關係の紛雜激甚なる事其三なり、階級といふ者の性質其四なり、而して這般の弊。竇は、恰も東洋文明と相補うて完きを得るに幾き者、次節聊か之を觀むとす。

第三節　社會學の前途

斯の如く分業的趨勢の恩賚として、第十九世紀殊に其

後半に於ける世界文明の進歩は昭昭たりと雖も、其流弊や漸く顯著なる者ありて存す、識者の燗眼夙に之を看破し、竊に其頽勢を回さむを思ふ、而も第十九世紀の後半や、一方に於いて這般の弊害の増長と同時に、他方に於いて頗る之に反抗する新勢力新因縁の駸駸として進むを看取せずんばあらず。其主要なる者左の如し。

第一、世界の觀念の進歩。學問の進歩に賴りて、宇宙の觀念は既に大に進歩し、第十九世紀の後半は、更に東西兩洋の、一に政治上、二に商略上の交通の頻繁を加へたるより、世界の觀念に一大進歩を加へ、隨ひて亦人類の觀念、歴史の觀念、文明の觀念に一大進歩を促すに至れり。歐西の東洋を理解するは東洋殊に我日本の歐西を理解するに

六　此點は既に十數年前より久しく然りしも、

七　此點は頗る覺束なきものあり、殊に普通教育なしに渡歐せる者に在りて著しきを見、亦我一部の人士には、成るべく自ら理解せざるを以て文明に到る所以と爲す、半開人の面目を發揮して、ヘエゲルなる者、倜儻の罷人と歐西又多數むべし。歐西の凡人は東洋を理解するの凡人は東洋を理解するは皆見在に謬解して知らず、是等は皆見在に謬解して知らざるなり、理想ある國社會の瓦民にして、各國社會改革者、識者、凡そ社會の水平線上に起ちて衆民を警覺するの地に立つ者なり、全く思想の選を異にす。如何なる國に代、如何なる時にも、野蠻半開文明の人士あり、亦如何なる人にも野蠻半開文明之人にも野蠻あり、明の三性質あり、所謂「御門迹樣の御返賦を頂戴する」の陋を辨知せずんば、所謂「御門迹樣の御返賦を頂戴する」の陋に陷らむ。　八

若かず、歐西の自ら理解するは東洋の自ら理解するしきが故に、結局新世紀の世界を理解するに最も利便なる地位に在りて亦最も進歩せる者は、東洋殊に我日本の識者卽ち是なりと謂ふ可し。宇内思想界の覇者として我日本の有する要求の一因は、實に玆に存す。

第二、萬國共同事業の進歩。今世紀の下半に在りて萬國赤十字同盟あり、萬國共同事業の進歩あり、經濟に於ける幣制、勞働者組合、其他世界大博覽會、各種の學術協會、各種の制度會議等、頻に出でて殆と應接に遑あらざらしむ、就中其最も進めるは、近時歐陸に起れる平和協會、四年前復露帝の提議により公設せる萬國平和會議なりとす。思ふに這種の事項や、新世紀

に於いては將に滔天の勢を以て來らむとすべし。

第三、社會主義の進歩。社會主義は從來個人の自由と福祉とに於ける差等を平均せむことを期したりしが、今や漸く世界各民族間の這般に向うて道理ある平等主義の福音を傳へむとす。新なる意義に於ける國際社會主義、古東洋學問の大旨義たる王道究竟の歸結、平天下の理想及事業は卽ち是なり。

第四、社會人文の進歩。其他前章に述べたる自然科學、哲學、史學、經濟學、及政法學の進歩發達は、今や益〻駸駸たる歩趨を以て進みつゝあり。

然らば則ち我社會學に對する要求は、將來に於いて更に益〻重大を加ふる者と謂ふべく、社會學の進運は更に益〻其宏大を加へ得るの地位に在る者と謂ふべし。社會學が其眞面目を發いて偉大なる進程を開き、以て人間の光明たり嚮導たるは、それ實に來らむとする新世紀の事か。近時斯學の自然科學的見解漸く廢れて、人間的見解漸く進む、事一些事に過ぎずと雖も、これをして將來澎湃滔天の勢を豫告する巖頭の洶湧たらしむると否とは、一に爾今斯學に從事する者の立志と勤勉との如何に存す。日東帝國は宇內の思想界に於いて今や復東天日出の好地位に立つ、靑年學生の自彊を須つ者、實に斯學に存す。

一八六四年ジエヂエヅ條約。

九　此事項の精神と事業とを總稱して「Inter-nationalism」といふ。一九〇〇年巴里に於ける世界大博覽會に催せる各種の萬國會議には、大に此精神の發動を見たり。